

## 十七、太平洋戦争と多古

### 1、太平洋戦争の勃発

昭和十二年（一九三七）七月七日に勃発の日華事変以来、米国と英國は、日本の侵略行為を阻もうと努力してきたが、戦争資源を求めて南方に進出しようとした日本

が、同十四年に海南島を占領するにいたって、米国は經濟断交でこれに応え、日本の反省を促そうとした。しかも、その翌年の日本は、タイ国と仏印との国境争いの仲裁を機に、北部仏印に進駐し、さらに石油を求めて蘭印にまで勢いを伸ばそうとしたから、米・英との対立はますます激しくなつていった。

これまで、北満地方でしばしば紛争をくりかえしていくソビエトとの関係は、同十六年四月、日・ソ中立条約が成立したため小康を得たが、軍の南進の意図は露骨になつていった。近代戦に欠かせない石油を得るためにオランダとの間に行なつていた日蘭会商は、六月に決裂し、翌七月には軍は北部仏印から南部仏印に進駐した。最後の段階にまで昇りつめた日米の対立を、外交交渉によつて打開しようとする日米会談が八月に開始されたが、軍の戦争計画はそれとは別に進められていた。十月、第三次近衛内閣が倒れ、軍部の強硬意見を代表する東條英機が組閣すると、日米会談の成立する見込みは失われ、遂に太平洋戦争は勃発したのであつた。

昭和十六年（一九四一）十二月八日、日本は海、空軍をもつてハワイを急襲し、米・英両国に対して宣戦を布告した。枢軸同盟の独（ヒットラー）・伊（ムッソリーニ）も宣戦し、米国もアメリカ大陸の諸国とともに日・独・伊の三国に宣戦を布告したので、世界を二分する大戦となつた。

連合国側の戦争準備が整つていなかつて、不意をついて攻撃に出た日本軍は、有利に戦争を進め、マレー・ジャワ・フィリピン・ビルマなどを占領したが、連合軍は反撃準備を整えて、同十七年五月の珊瑚海海戦、六月のミッドウェー海戦にて日本海軍に打撃を与え、八月にはガダルカナル島に上陸して反攻に轉じた。

戦争の勃発以来、東條内閣の独裁は強化され、議会は有名無実となり、言論の自由は圧迫され、経済・文化・生活のすべてに張りめぐらされた統制の中で、日々に悪化する配給生活に耐えながら、国民はただ戦争へとかりたてられてはいた。

ヨーロッパでは、昭和十八年二月、独軍がスターリングラードで大敗し、九月にはイタリアが連合国に無条件降伏をした。この十一月、米・英・中華民国の三国は、北アフリカのカイロにおける代表者会議の結果、カイロ宣言を発して、対日戦争の目的を明らかにした。すなわち、日本との戦争は、日本の侵略を制止し、こらすためで、領土拡張を目的とするものでなく、第一次世界大戦

以来、日本が占領した太平洋の島々のすべてを日本から取りあげ、満洲・台湾・澎湖島など日本が中国から奪つた一切の地域を中国に返させることを目的としている。また、朝鮮を自由な独立国とすることを決意していると、いうことを声明した。

反抗に転じた米軍は、昭和十九年七月には、サイパン島を占領し、東条内閣は総辞職し、小磯内閣が成立した。翌二十年になつて、フィリピン・硫黄島が相繼いで占領され、米空軍による本土爆撃が激しくなり、三月の東京大空襲の翌四月には沖縄に上陸した。この頃、ソビエトは日ソ中立条約を延長しない旨をわが国に通告。ために小磯内閣は総辞職し、鈴木貫太郎内閣が成立。五月に入るとドイツもソ連と米英軍に攻められてベルリンを占領され、連合軍に無条件降伏し、第二次ヨーロッパ大戦に終わりをつけた。米・英・中華民国は、ベルリン郊外のポツダム会談により、先きのカイロ宣言を再確認し、対日共同宣言を発表した。無条件降伏の勧告である。八月に入つて広島・長崎と原子爆弾が投下され、ソビエトも宣戦して満洲に進撃してきた。ここに日本も降伏するよりほかに道はなく、ポツダム宣言を受け入れ、八月十五日、天皇が詔書を発して軍事行動の停止を命じ、九月二

日には、東京湾頭軍艦ミズーリ号上で、正式の降伏調印が行なわれたのである。

人類の歴史が始まって以来の大戦は、ここに終りを告げた。世界の主な国々が総力をしほり、原爆をも使用して、海に空に陸に死闘をくり拡げて、未曾有の惨禍をもたらしたこの大戦の結果は、戦勝国も戦敗国も、容易には立ち上がりえない深刻な物心両面の打撃を受けたのである。

## 2、太平洋戦争の国際的地位

この戦争による日本の国際的消耗は、別表の数値が示すように莫大なものであつた。

宣戦布告から三年八か月の短いが長い間、戦場が太平洋および周辺地域という広範囲の陸と海と空とであつたこと、殊にB29による首都東京を始めとする各都市や軍事関連施設の完膚なきまでの破壊、艦砲射撃や機銃掃射による無差別な破壊、果ては原子爆弾投下による徹底的な破壊によるものであつたから、心に受けた傷痕は遙かに大きく測り知れぬものであつた。

(1) 軍人・軍属の被害

	総数	陸軍	海軍
死亡者	一、五五五、三〇八人	一、一四〇、四二九人	四二四、八七九人
負傷行方不明	三〇九、四〇一	二九五、二四七	一四、一五五
合計	一、八六四、七一〇	一、四三五、六七六	四二九、〇三四

(朝日新聞資料による)

(2) 一般国民の被害

	死亡者	重傷者	軽傷者	総数
空襲被害	二九七、七四六人	一四五、八四六人	二二一、四四一人	六六五、〇三三人
艦砲射撃外	一、七三九	三五八	一、一八五	三二二八二

(3) 航空機の損失

開戦時	生産数	損失数	終戦時
四〇〇〇機	六一〇〇〇機	五〇〇〇〇機	一六〇〇〇機

(4) 艦艇の損失

開戦時	生産数	損失数	終戦時
三九〇	八二七	六八四	五三三

(5) 国富被害

種別	金額	被害%
官有	四、八一八、五一四、〇〇〇円	九・八
公有	二、二四四、三七三、〇〇〇	四・五
私有	四二一、六一〇、七二四、〇〇〇	八五・七
合計	四九、六七三、六一一、〇〇〇	一〇〇・〇

(全)

戦没した場所は、次のよう広い範囲の地点であった。

- 横須賀 ○北支 ○中支 ○ルソン島 ○台湾沖
- ソ連 ○北千島 ○ニューギニア ○セレベス島
- 東支那海 ○北太平洋 ○フィリピン沖 ○マレー半島 ○大鳥島 ○中華民国 ○南太平洋 ○マレーシア ○平安北道 ○シベリアナリンスク ○支那江

3. 郷土出身の戦没者

この大戦に参加した軍人軍属は、膨大な数であつたが、昭和十七年八月にガダルカナル島の守備隊が玉碎してから、応召者の数は極限の状態に達していたとみえて、どこの町村にも青壯年層の姿を見られなくなり、かえつて無言の帰還をされる兵士を出迎えることが、多くなつていった。

この多古の地から参戦した方の数は、正確には分からぬが、相当な数に上つた。これらの中で、戦没された方の数は、小田原遺族会名簿によれば三十四名の多きに及び、内訳は将校・下士官三十名、軍属二名、兵科不明二名となつてゐる。出征に当り、氏神白山神社に参拝して、戦勝祈願と武運長久を祈念し、村役、在郷軍人、青年団、国防婦人会に見送られ、勇躍して戦地に向かつた方たちばかりである。

西省 ○ フィリピン ○ 比島ネグロス島 など  
 また、尊い生命を奪つたものは、魚雷攻撃であり、飢餓であり、敵弾・空爆であり、火焰放射機であつたが、  
 身命を堵しての戦いをされたことに変わりはない。

### (1) 戦没された方がた

No.	戦没者氏名	階級	死亡年月日	死亡場所	遺族氏名	続柄	住所
1	安藤光雄	陸軍中尉	S二〇・四・八	此島ネグロス島	安藤康哉	弟	今当時多古住一一
2	福山守二	曹長	S二三・五・九	シベリアナリンスク	福山ギサ	妻	今当時多古住六七八
3	田淵照雄	不明	S二一・一・七	帰還後、自宅	田淵富子	妻	扇町二二六一六
4	中山敏雄	不 <sup>明</sup>	S二〇・五・一〇	ルソン島	中山八重	妻	扇町二二四一〇
5	日比谷一朝	軍属	S十八・一・一	台湾沖	日比谷トメ	母	扇町二二四一三
6	藤井元	兵長	S二・三・七	達	藤井トク	母	扇町二二七五
7	山室堅三	兵長	S十九・六・十八	ニューギニア	山室コウ	妻	扇町二二七六
8	小沢博雄	軍属	S十九・八・二九	セレベス島	尾崎茂吉	妻	扇町二二七七
9	加藤武男	陸軍少尉	S十九・十二・九	東支那海	加藤アキ	妻	扇町二二七八
10	代田清	上等兵	S十九・九・三	中支那海	代田モト	母	扇町四一七一三
11	代田定光	伍長	S十四・八・二六	ノモンハン	扇町四一七一六	姉	扇町四一七一五
12	中山義雄	兵	曹	S十九・二・二六	代田モト	妹	扇町四一七一四
13	浜野高義	上等水兵	S二〇・三・二二	北千島	浜野フサ子	妻	扇町四一七一三
14	浜野久蔵	伍長	S十九・十一・十五	横須賀	浜野ツル	妻	扇町四一七一二
15	新井芳次郎	軍属	S十九・四・二六	東支那海	山口昭一郎	妻	扇町四一七一一
16	磯崎安平	兵長	S十八・四・九	北太平洋	磯崎繁雄	妻	扇町五五五五
17	佐藤富士雄	軍属	S十九・十一・十五	全	大鳥島	夫	扇町五一〇八
18	黒柳勇	兵長	S十九・四・二六	フィリピン海	杉崎弘	兄	扇町五一〇六
19	閑野静雄	上等兵	S十九・五・二	中華民国	黒柳清	義弟	扇町五一四二七
20	田中清吉	伍長	S十八・四・二六	南太平洋	田中三郎	兄妹	扇町五一七九
21	中山重治	軍属	S十九・四・二六	南太平洋	内藤隆正	弟	扇町五五七五
22	土屋比佐夫	兵長	S十九・四・二六	南太平洋	内藤敏子	兄妹	扇町五一四二七
23	内藤忠光	軍属	S十八・四・二六	南太平洋	中山鑑	兄	扇町五一四二七
24	府川三郎	兵長	S十八・四・二六	南太平洋	村越正江	兄妹	扇町五五七五
25	村越最平	軍属	S十八・四・二六	南太平洋	義姫	妻	扇町五五七五

26	森克巳	不明	S二・七・三	平安北道竜川郡	森信光	父	扇町五五九
27	菅田久寿	曹長	S十三・〇・十五	支那江西省	菅田寿雄	長男	多古三九〇九
28	城所氏之助	上等兵	S十七・一・十九	マレー半島	城所吉五郎	父	多古三九七九
29	瀬戸盛定	上等兵	S十九・五・二十五	支那源三	瀬戸勘太郎	弟	多古三九三九
30	添田春光	兵長	S十九・一・〇八	ニユーギニア	添田昌子	父	多古三七九
31	中山正夫	兵	S二〇・五・一	北海道	瀬戸源三	弟	多古三八四
32	中山市郎	兵	S二・九・十三	中山耕平	父	多古三七一	多古三八七
33	古川泰兄	兵	S十九・八・十八	ニユーギニア	古川舒吉	兄	多古三六七七
34	古川泰兄	兵長	S十九・八・十八	古川舒吉	父	多古三六七七	多古三六七七

(小田原達族会名簿)

### (2) 中山重治軍曹の戦歴と思想の形成

この戦没者の一人、上多古出身の中山重治氏の戦歴と思想の形成を追求してみよう。

菩提寺たる玉宝寺の墓地に一際目立つ墓碑がある。先きの太平洋戦争で輝く武勲を挙げて名誉の戦死を遂げられた中山重治氏の死を悼んで、その嚴父正平氏（昭三五他界）が、昭和十九年春の彼岸の日に建立したものである。碑の表面には「陸軍軍曹功六級勲七等中山重治之墓」と刻まれ、裏面に次の碑文がある。

「自分は立派にやつて見せる。きつときつと……。

白木の箱で帰つたら、良くやつたと、家族揃つて一言褒めてやつてくれ。」中山軍曹ハ自己ノ決意トシテ從軍手帖ニ斯<sup>カ</sup>ク書キ遺シタリ。アア、皇軍魂ノ顯現。君ハ中山正平ノ長男ナリ。資性温厚ニシテ沈毅。県立吉

田島農林学校ヲ卒へ、更ニ中央大学ニ学ブ。昭和十六年一月、現役兵トシテ東部第六部隊ニ入り。五月ニ大命ヲ奉ジテ、勇躍征途ニ上り、広東省ニ於ケル警備ニ任ジ、以テ仏印ニ進駐シ、更ニ泰国ニ入ル。大東亜戦争ノ勃発スルヤ、馬來作戦ニ参加シテ、屢々偉功ヲ奉シ、甲種幹部候補生トシテ、将来ヲ嘱望セラレシニ、十七年一月十七日、ペンド・ロツクノ激戦ニ壮烈ナル戦死ヲ遂グ、享年二十二、戦功ニ依リ、功六級勲七等ニ叙セラレ、十九年四月、靖国神社ニ合祀セラル焉。

法名……天鐘院忠光重心居士  
君にふさわしい法名といえよう。

農家の長男として生を享けた君が吉田島農林学校に進学したのは自然であるが、更に中央大学に進んだのは向学の念止みがたく、ご両親を説得してのものであつた。既に強固な意志を持ち何ものにも動じないところがあつたのである。

昭和十六年一月、現役兵として東部第六部隊に入隊し、

#### 4、空爆と被害

昭和十九年七月、サイパン島が玉碎すると、米軍の本五勇躍征途に上るに当り、従軍手帳に書き遺した言葉「自分はきっと立派にやつて見せる。きっときつと……。白木の箱で帰つたら、よくやつたと、家族揃つて一言誓

めてやつてくれ」には、皇國の軍人として生きぬく考え方一につまり皇國魂が躍動しており、死生一如の人生観も堅持しておられたことが伺える。多感な少青年期に森丑太郎校長や吉田島農林学校長の教育、とくに大学時代に、当時の学生に愛読された葉隠れ精神——武士道とは死ぬことと見つけたりの本は、君もまた愛読。これに共鳴し感動したに相違ない。そして自らが選定し進学した中央大學の教師たちの教育力にも影響されて、君の皇國魂は形成されていつたと思われる。

君が征途についた昭和十六年の五月は、大東亜共栄圏の樹立を目指して、日華事変が拡大されていた時であつたが、君は南支の広東→仏印→タイ→マライと南進を続け、ペントロツクの激戦には隊長として部下を指揮して奮戦し、遂に散華された。将来を嘱望された優秀な青年下士官であり、甲種幹部候補生であつた。まさに惜しまれる人物。英靈の平安を念じ筆を描く。

東京の大空襲があつて、下町を中心に全くの焦土と化した。翌四月には沖縄も玉碎して基地化すると、本土空爆の容易な二つの基地ができたが、軍部の強硬な主戦論から本土決戦も耳に入るようになつた。相模湾、九十九里浜、鹿島灘などが敵の上陸地点と仮想し、陣地構築が強化されていつた。

空襲警報が間断なく続く五月二十九日（火）、静岡地区より富士山の北方を経て、横浜・東京市内に侵入した敵機は横浜市の大部分を焦土と化した。B 29が五百機、P 51艦載機が百機の来襲で畳一枚に一箇の割のじゅうたん爆撃であつた。その恐怖もさめぬ七月十六日に湘南の平塚市が大空爆を受けた。

#### (1) 七月十七日（火）の多古の空襲

この平塚空襲の敵機の中の一機が、午前〇時過ぎに飯泉方面から下多古を急襲して焼夷弾を投下したので、消火に当つた岩本商店主の米蔵氏が、即死されたという痛ましい事故となつた。共に消火に当つた隣家の塩見文雄氏は、当時の情況などについて次のよつに話された。「夜半十二時過ぎ、平塚空襲の後、飯泉方面から来襲の米軍艦載機一グラマン機だつたようだが、塩見、岩本両家の間に焼夷弾を投下した。この時、警備には、同じ隣組の

魚浜・岩本・塩見の三人が当り、家族は全員河原に避難していた。落下した焼夷弾は、トタン屋根を突きぬけ、天井を抜いて厚い板の神棚で止まり、盛んに青い火を噴いた。わたしたち三人と岩本さんの娘さん一人で、バケツリレーで水をかけた。この頃はどの家でも家中に貯水槽があり、常に満水状態に水を貯めて非常に備えたものだ。焰が消えてホツとした途端に弾が破裂。岩本さんは胸に一杯の弾の破片が突きささつて即死をされたのです。気の毒なことをしました。この敵機は付近民家二戸と谷津、青物町にも投下し、数人の方が犠牲となつた旨を間もなく耳にした。この敵機は、湯浅電池小田原工場が軍事施設で爆撃の対象であることを知つていて、偵察のために奇襲したのではないか。

この事故後、多古では内多古の切り通しの西側の丘陵に、切り通し側から横穴をいくつも掘つた。この穴を掘つた丘陵は、現在見るよつに西に後退しているが、この事故までは、空襲時には防空頭巾ずきんを被つて防空壕に入る、河原に逃げる、あるいは近くの倉庫に入るなどしていたが、事故後はこの横穴を利用したものであつた。」と。

多古における空襲による初の犠牲者であつたが、心から、み靈の平安と遺族の方の多幸とともに戦争という

ことのなき世界の出現を念じてやまない。

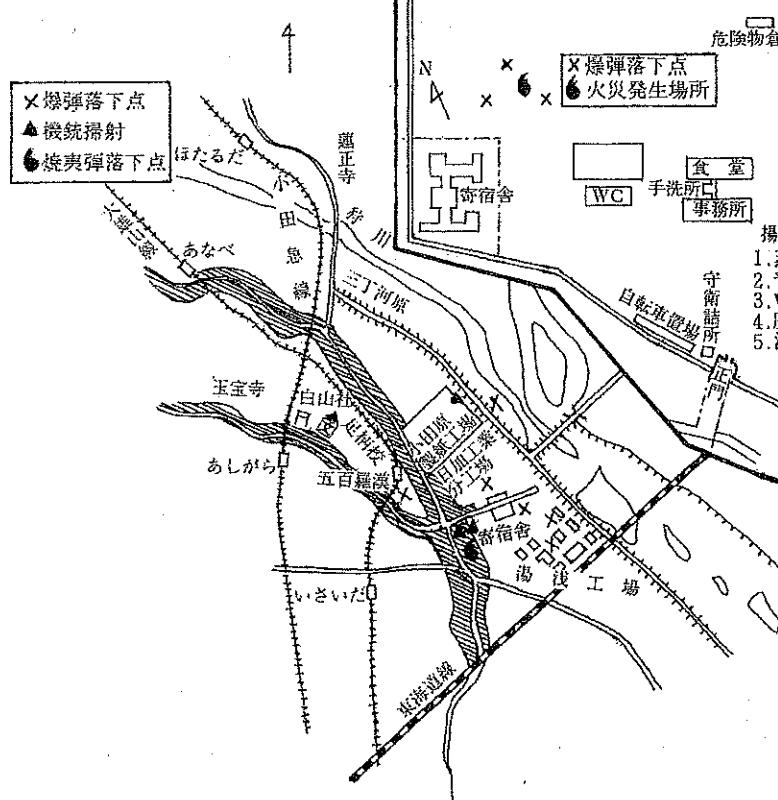
## (2) 八月十三日（月）の被害

足柄小学校の日誌に「天候晴れ、今朝、小田原地方が爆撃さる。交通は杜絶し混乱す。上、下、小田原地方の被害は相当なり。国産電気、湯浅電池、富士フィルム、新玉国民学校その他にて相当の被害あり。大雄山電車は五百羅漢駅に近い防空壕の被爆により、圧死者十三名を出す。本校には被害なし」とあるが、県西地区で、この日最大の被害を受けたのは、この多古の地であった。湯浅電池工場とその周辺、そして五百羅漢駅近くの防空壕の被爆による合計二十七名の死者と建物等の被害である。

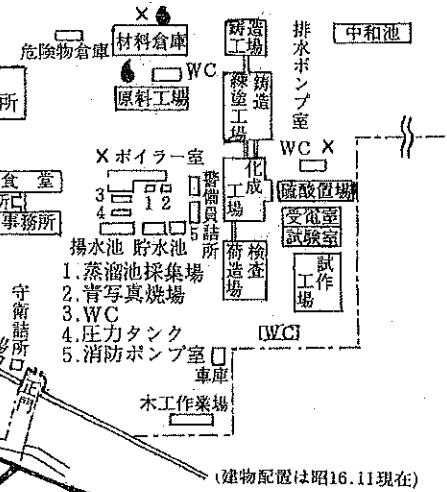
### ① 湯浅電池工場とその周辺

被害箇所は、被害図面の通りである。相模湾沖の航空母艦より発進したグラマン機による無差別攻撃であった。爆弾は、重さ二百～五百キロのもので、工場内の三か所に投下されたが、落下地点の穴の大きさは、直径5mであった。建物の焼失・破壊は九七三坪の規模で、十三名の被爆者を出したことが痛まれる。

多古地内の被災図(図123)



湯浅電池小田原工場被災図(図122)



○被爆者名簿

氏名	被爆者	遺族	現住所	続柄	被爆者	
					享年	職場
高沢てる	十九	資材係	高沢隆	父	小田原市柏山二六二七	高沢てる
神羽住子	二〇	庶務係	神羽コウ	母	全中町二六一三	神羽住子
渡辺シゲ子	十九	全	常盤アキ子	姉	全堀ノ内九四	渡辺シゲ子
梅本寿子	十八	全	梅本守康	弟	全飯田岡三九一三	梅本寿子
橋本イト	十七	全(タイプ)	橋本修平	兄	全浜町四一三一三	橋本イト
鈴木喜代子	二十一	一課工場加工場	鈴木金作	父	全栄町三三一五	鈴木喜代子
米山初子	二十二	十八	田中民藏	兄	全浜町二二六一五	米山初子
田中房代	二十三	全	田中定夫	父	全中町一三四一六	田中房代
中根静子	二十二	全	中根清兵衛	父	全本町四一〇一九	中根静子
倉橋ヨシ子	二十	全	不明	不明	富崎県富崎市江平町二	倉橋ヨシ子
倉橋静子	二十二	全	田中ヒデ子	妻		倉橋静子
加藤正治	十五	二課工場鋳造場	全	全		加藤正治
田中善一	三十九	全練塗場	全	全		田中善一

(昭和四十二年六月、湯浅電池調査)

工場周辺の人的被害としては、機銃掃射による左記の犠牲者を一名出したことが挙げられる。

氏名	死亡年月日	死亡場所	遺族氏名	続柄	住所
小砂まさ子	昭二〇・八・一三	自宅	小砂理助	夫	扇町四一七一三

外に、機銃掃射を受けたものに、足柄小学校の校舎・運動場、湯浅工場北側の中村勇氏宅（現自治会長）及びその西隣の繭の集荷場（今はウイングの駐車場）があるが、いずれも軽微にすんだ。

小型爆弾投下による被害地点は、工場北側に接する日加工業分工場（中破、現在、喜左衛門、釣道具店、コナカ店のある位置にあつた）、小田原製紙工場と控え堤防の接する地点（直径数mはある大きな穴ができる）及び三丁河原の南東部の田んぼ（添田春原氏所有—今は県有地だが、直径数mの穴が生じた）が挙げられる。

かかる大きな被害を生じた原因は、湯浅電池工場が軍需工場であつたからであるが、工場が多古の地に設立された事情（立地条件を考察すると、次のように言えよう。①、横須賀に海軍潜水艦基地があつたので、それに近い場所を選定し、最終的に多古の地を選んだ。

②、日華事変後、海軍潜水艦用の大型基板を中心とする製造工場として、生産施設が一か所に集中する危険をさけて分散するために、昭和十四年に小田原工場が建設されることとなつた。同年十月に土地（多古及び井細田）五〇、七一坪を買収。十五年三月に地鎮祭、十六年三月に一期工事完成し、同十一月

一日操業を開始し、海軍潜水艦用蓄電池の生産を開始。昭和十九年一月には、陸海軍の大臣より軍需工場として指定された。

(イ) 良質の地下水が豊富にある。酒匂川・狩川の形成した広大な扇状地の中に位置し、地質構造の上からも、良質の水の宝庫である。

ここに、江藤常雄氏（昭五生、現在、自治会会計担当）の体験記をのせたい。敗戦の年の四月、湯浅蓄電池工場に入社し、かたわら青年学校に通つた紅顔の美少年時代の体験をリアルに記録し、寄せられたものである。

#### 空襲の体験記

江藤常雄

戦火が激しくなつた昭和十九年十月、私は蓮正寺の国産電気工場で飛行機のエンジンの組立に動員された。翌二十年三月、足柄国民学校卒業と同時に湯浅工場に入社した。新玉・本町・城内の各国民学校より入社の仲間も各職場に配属されたが、軍需工場であるために自宅には帰れないことが分かつてがつかりした。

総員二百名は、現在池上にある二階建てアパートに収容され、一室五名ずつの集団生活に入った。舎監数名が私たちの指導と管理に当たつた。やさしい人、酷しい人、

いじわるな人……いつの時代にもいるものである。生活は軍隊式で朝七時起床。現在の西相銀行より大橋を渡り、会社入口で一斉に「歩調をとれ」の合図で警備係前を通過。次いで並足となり、第一食堂で朝食を全員でとる。メニュー通りの食事を棚より取り、グルーピーごとに約二十分で終わる。その後、各職場に急ぐが、通路はすべて板塀で仕切られ、警備係が名前を呼んでチェックし、OKのサインで職場へ行くのである。胸章は色別により、共通職場のもの、単体のものとが混在して、みだりに他の職場に出入はできない。私は十名の仲間と練塗工場で働くことになった。当時の極板は長さ一・五m、巾〇・六mだったので、少年の私は苦労をした。一枚ずつ丁寧に木枠に掛ける。部屋は一定の湿度を必要とするため蒸気が通っているので熱くて大変だった。陽極板は鉛粉に稀硫酸を練り合わせて格子体に塗布され、時間の制約は余りないが、陰極板は酸化鉛で稀硫酸とグリセリンを練り合わせるために硬化が早く、先輩によく怒鳴どなられていた。だから昼食時間は本当にうれしかった。そして自分の時間を大切にすることを知った。午後三時には、青年学校に行くため、現在の富士写真小田原工場の二階建ての校舎で機械学科の勉強をすること一時間。四時には舎監と

共に宿舎に帰る。風呂に入つて一日の仕事や家族の話など話し合い笑つたことは忘れられない思い出である。午後九時「消灯」の合図で、各人はトイレに行ってから就寝することにしていた。だが、私の部屋は二階のため、夜中のトイレは恐ろしく、止むなく廊下の消火桶を利用した。ところが二日目に発覚し、朝の点呼の時に舎監より「この部屋は小便臭い」と言われて調査され、部屋の仲間同志が向き合つてシゴキを受けた。しかし、原因が分かり全体責任として「注意」にとどまり出社をした。そこで代表が舎監に対策を申し出て、通路の電灯に黒い袋を被せて点灯許可をもらうことになり、夜中の用便ができることになった。

戦争が激しくなり、舎監より全員残業の指示がでて病氣以外は認めぬとのこと。夕方五時、六時、七時と就労時間が長くなり、疲労も増して、毎日が辛かつた。今の時代なら、年少者就業法に違反することが行われていたわけだが、残業には夜食が出るので進んで残業をする仲間もいた。

次に風呂も怖いものの一つ。残業後に一斉に入浴するので裸になつて順番を待つことがしばしば。ある日入口で数名の従業員が「今、組長が入浴中だから少し待つよ

うに。」と言われ、職場の上司と思っていたら、入墨をしたやくざの組長と聴きびつくりした。当分の間、この話は職場の話題となつた。

話は戻るが、宿舎入居の当時は四時に退社してから入浴・食事をしても、寝るまでは相当の時間がある。十五歳の年頃では、空腹は堪えられない。そこでアパートの近くの者は、自宅へ行つて何か食べる物を持つてくるようになつて、毎日ではないが、井細田在住の者は鍋焼きを持つてきてくれた。私も母に話してズルチンを入れて甘くした鍋焼きを持参して喜ばれた。その後は、甘諸ばかりであつた。

ある日のこと、母が近所の米屋より肥料用の豆粕を碎いて熱処理をしたものを見たとき、咽<sup>のど</sup>が乾いて水を飲み、一人が下痢をしたため、一時は赤痢ではないかといわれ、仲間が豆粕のことは言わなかつたので、原因不明のまま決着がついてホツとしたことがある。

敗戦の年の八月十三日、快晴の朝だつた。いつもの通り午前七時ころに警戒警報が出ていた。サイレンが鳴つても解除になると思つていた。B29がきれいに飛行機雲を残していく日が多く、空襲警報のサイレンもさして気にしない日々になつていた。ところが、この日の飛行機

は低空なので友軍機と思い、皆仕事をしていた。

午前八時前後と思うが、数機の艦載機が急降下した瞬間、ダッダッダッと機銃の音とともにボカンボカンと爆弾攻撃を受けた。仕事どころか、隣の化成の屋根は傾き、入口はどこか分からぬので、ウロウロするだけだつた。

そのうち爆音がしなくなつたので、やつと我に帰つたが、その間、何がどうだつたか、全く判らない。外へ出たら「消火、消火」と言われたが、水は出ないし、火は広がるばかりで、手はつけられなかつた。自分の防空壕に入ろうとしたら、数人倒れている。頭から血が噴いて髪が顔一面に下がつてゐる。海軍の方が「本部、本部」と言われたので、どこが本部か分らないが、夢中で「本部、本部」と連呼しつつ進んだら本部についた。そこで「死んだ、死んだ」と告げ、手をつないで現場へ行き、始めて直撃を受けたことが分かつた。全員救助に来てくれた。私も大先輩を戸板にのせて診療所に運んだが、この方は

小林病院で帰らぬ人となつた。その後は、火災現場に行かず、母の顔が浮かんで帰ることしか考えず、壊れた屏を乗りこえて、今の北分署の前に来た時に、二百m先に母が立つてゐるのに気がついた。無我夢中で母親の胸に飛び付いた。

当時、足袋屋をして近所の足袋・脚絆・手甲などを作っていた顔見しりの方から「お前の子供の職場は被爆して全滅だ」と言われて、母は私の帰りを待っていたのでした。あの時、あの防空壕に入っていたら今の私はない。

帰宅して裏の竹藪の横穴防空壕に母と行き、近所の人があ多勢いたので安心した。所が近くでバーンと音がした。

壕の中の人ばかりした。現にある北分署の裏側にあつた横穴式防空壕の前に電車が止まっていて、ガヤガヤ人の話し声が聞こえる。壕の人と行つてみると壕の入口が土で埋まつていて中から人声がする。この直後に足柄国民学校に駐屯中の陸軍兵士があれ多勢来て掘り始めた。子弟を抱えた母親や年寄が救出された。兵士の指示で旧小

田原製紙工場（現グリーンタウン）へ運ばれたが、神原さん、清水さんの一家が死亡された。

この被爆があつてから数日後、会社に行き、指示で死体の発掘作業をすることになつたが、猛暑の日が続く中なので苦痛だった。工場敷地が田を埋め立てたものなので、地下水が湧き、臭氣で気分を悪くする人も多數いた。数日間掘り続けたが、三遺体は発見できなかつた。

その後、会社は供養塔を現地に建立して、毎年八月十三日は祭壇を飾り、全員により冥福を祈る行事は、四十

四年を経た今日でも引き継がれている。現在の慰靈塔は爆心地より移設したものであるが、遺族も老齢化して、以前のような多数の参列者は見られない。

敗戦で民需生産に転換した湯浅工場は一般向きの蓄電池の生産を開始した。産業を支える自動車に不可欠のバッテリーの性能と品質の向上に努めて、数々の優れた製品を市場に送っています。

従業員九五〇名、厚生施設の食堂、大浴場、診療所、各種スポーツ施設も完備して快適な職場環境を呈し、寮社宅関係の修復等にも積極的に取り組んでいる。

（終り）

## ②多古の防空壕

小田原消防署北分署の西側、大雄山線沿いに、太平洋戦争末期に防空壕が造られていた。西側に入口があつて、ちやちな造りだったが、人間の生命を守る避難場所として大きな役割を担つていた。

敗戦を一日後にした八月十三日の午前九時過ぎ、湯浅電池工場の空襲と前後して、米軍機はこの防空壕近くを走行中の大雄山電車を攻撃目標として爆弾を投下した。

非戦闘員の乗る電車攻撃は、非人道的であつて許さるべきことではなかつた。この至近弾の爆風で壕が崩れ、

に避難していた入口付近の藤沢徳造氏と子供二人は辛うじて救出されたが、奥の方にいた清水・神原・山田の三家族十一名と通行人二名の計十三名は、不運にも圧死した。この救助には折から足柄国民学校に駐屯していた突

部隊の兵士が急を聽いて現場に駆けつけ、迅速果敢に救出作業に当たつたが、遂に救出はできなかつた。不運な戦争犠牲者であつたわけであるが、その氏名・遺族を次に記しておく。

No.	氏名	年齢	遺族	住所	備考
1	神原 関蔵	不詳	神原 利男	扇町五十九十五	
2	神原 ハナ	全	全	全	
3	名護 ナベ	七〇	小酒部縫造 奈美子	扇町五十八一九	沖縄出身。小酒部縫造が施主となり昭六三十一十七交通事故死
4	小酒部 田鶴	十七	全	全	
5	清水 セン	五五	清水辰雄	曾比二一六八	奈美子は継造の妻だが、後年独居老人
6	川口とみ子	三〇	全	全	
7	川口 美和子	二	全	全	
8	清水 ヒデ子	二五	清水辰雄	曾比二一六八	
9	清水 多美子	一五	全	全	
10	清水 芳雄	一一	全	全	
11	山田 友子	一六	山田要之助	原三一三 南足柄市和田河	
12	山田 温子	一一	全	全	
13	芦田 義雄	未祥	未祥	未祥	玉宝寺に埋葬 空岩覺義信士

防空壕内に生き埋めとなつて窒息死された十三人の痛ましい事故から、少し時間を置いて、大部分の仏は遺族

の手に渡つたが、名護ナベ・芦田義雄の兩人のように身寄りなき仏については、小酒部縫造らが施主となつて、

玉宝寺に手厚く葬られた。

功德主

加藤栄造

加藤公明

事故のあつた地点一帯の地主の加藤兵太郎商店の榮造氏は、深く発願するところがあり、昭和四十四年（一九六九）一月、この地に身代り地蔵尊を建て、八月十三日の命日には、玉宝寺住職による読経もあるが旧盆の棚経のため、十四日に日を替えて、故人の冥福を祈つてゐる。しかし、最近は、実弟にあたる寿英住職（池上眼藏寺）が代行している。

身代り地蔵尊の台石には、次の銘が彫られてある。

○右側

生を明らめ、死を明らめ、ただ国の平和を願い、

国に光明の来るを信じ、太平洋戦争の終りも近

い昭和二十年八月十

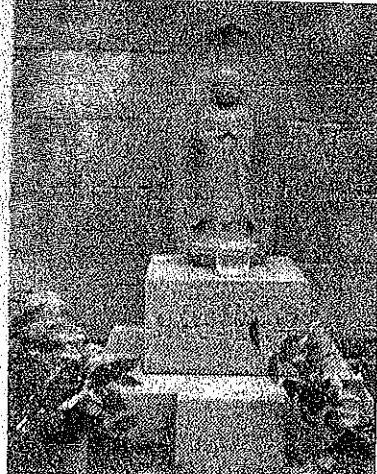
三日、米機の爆撃により、防空壕内に生き埋めとなつた諸精

靈の冥福を祈り、こ

身代り地蔵尊

を建立する。

昭和四十四年一月吉日



5、兵隊・空襲・学童そして食糧  
敗戦の年たる昭和二十年は、食糧はますます逼迫し、兵力もまた消耗して、戦力の著しく低い中で戦争はなお継続された。サイパン島が前年七月七日に玉碎し基地化されると、本土空襲は容易となり、三月十日の東京大空襲、五月二十九日の横浜大空襲など、五百機を数えるB29と数百機のP-51機の大編隊で、徹底した焼夷弾攻撃によつて、国土は相次いで焦土化していった。

だが、政府は本土決戦を想定して帝都周辺の敵前上陸地点の防備を固め、陣地構築を強化していった。相模湾上陸を想定しての国府津・久野山・石垣山などを結ぶ後方山地の陣地構築もその一つであった。そのために、軍部の学校接收も行われたのであつた。

(1)足柄国民学校・青年会場の接收

四月十四日（土）に、足柄国民学校（露木虎治校長）と丘陵上の青年会場が即座に接收された。学校は教室を空けて貸与し、二部授業を実施するとともに、軍に協力する活動を更に強める戦時体勢の經營をしていつたが、

この第一陣の兵隊は農耕隊と称し内山中尉が隊長で農家の長男ばかりで編成されていた。隊員は百人、百五人であった。講堂は軍の毛布・鮭の罐詰類を所狭きまでに収藏され、米などの主食は、運動場に板を置いてその上に置き、シートをかける形で保管された。その任務は空地の利用・開墾による食糧増産を図ることが主であったが、久野山の松根を掘り出して、ヨキでこれを割つて油を採つたり、横穴を掘るなどの作業もした。

四月十七日（火）には、砲兵部隊が到着し駐屯したが、七月十一日（水）に内山隊が富士に引揚げると、第三陣として姫路部隊の突三七部隊が駐屯した。隊員百、百五十名程で、隊長の藤本中尉は、加藤兵太郎商店（本部）に宿泊。隊の主たる任務は陣地構築にあつたが、遊休地を借りて農耕をしたり、立木を切つての木材の運搬もしたのである。

主食も衣料も徹底した配給制度の中、七月一日から主食は、それまでの二日二合三勺から二合、など減量配給となつたので、一般庶民と同様に兵隊の食事情も苦しくなり、空腹に耐えかねて「何でもいいから、食べる物を惠んでくれ」と、農家に乞うものも、後を絶たなかつた。一般非農家世帯でも物交はよく行われ、育ちざかり

の子供を持つ母親が、嫁入り道具や晴れの衣裳類を、米・麦・甘藷・里芋などの主食と物々交換することも、しきりに行われた。

かかる世情の中で、足柄国民学校の児童・職員が、その採集した野草・蕗・蕨あるいは乾燥させた甘藷づるや蕗の漿油煮などを作つて、相武台陸軍病院や罹災した横浜市民そして地元玉宝寺や眼藏寺そして東泉院に集団疎開中の横浜市大岡国民学校（この項については、足柄小学校百十年誌たる「あしがら郷土読本」の教育史編に、学童の集団疎開と題して報告してある）の児童に贈つていたのであるが、同生共苦というか、乏しきを分かちあう美しい人間愛の現れであり、美談といふべきことであつた。

## (2) 空襲と学童

空襲下の学童たちは、どんな生活を送つてきたか、足柄小学校の当時の露木虎次校長の日誌から取りあげてみよう。五月から九月末日までの学校での体験の一端が分かるが、開戦の年度からの皇国民として鍛磨育成を目標として、教科を国民科（修身・国語・国史・地理）、理数科（算数・理科）、体鍊科（体操武道）の編成で実践してきたが、敗色の濃い十九年からの教育は名のみで、「欲し

がりません、勝つまでは」を目標として耐乏の生活訓練の場と変わった。だが、この困苦欠乏に耐える生活体験は貴重だつたと思われる。

○四月十四日（土）、皇軍に教室を貸与。五年以下は二部教授を行う。校長は芦子小より着任したばかりの露木虎次氏。

○四月十七日（火） 夕刻、第二陣砲兵部隊が到着。

○全十九日（木） 小田原製紙・富士フィルムに高一・

二男女動員につき状況視察

全二十二日（日）初等科五六年男女舟原山へ蕨狩り

○四月二十四日（火）米軍爆撃機百機、伊豆方面より帝都侵入。農耕隊の内山中尉が農地依頼に来校。

○全二十七日（金）高一男女、舟原山に蕨狩り。

○全二十八日（土）十一時、警戒警報、B29偵察。

○全三十日（月）始業と同時に警戒警報発令、状況を判断し一斉に下校せしむ。家に着く頃に空襲警報発令。

○五月一日（火）相武台陸軍病院より蕨を受領に来ないため、校内の農耕隊と砲兵部隊に贈る。

○全二日（水）雨。内山隊の一兵士が発病死亡せしに

より校庭で慰靈祭。青年学校・女学校とともに参列、

香資を捧げる。

○全八日（火）大詔奉読式を行う。十一時、空襲警報

（十二時十七分解除）。B29とP51五〇機来襲。高二男女が農耕隊に協力。釘二貫目を地方事務所に届ける。

○全二十一日（月）初等科一年の弁当五個紛失す（昨日は三個）

○全二十九日（火）初五が四ツ尾裏山に野草採集。横浜空襲でB29五百機、P51百機が編隊で来襲、白山神社の必勝祈願祭に六男の二組代表参加。横浜戦災地へ

箸二、八〇〇人分を寄贈す。

○六月一日（金）高等科一、二年男女、四ツ尾裏山に野草採集を行う。十時、警戒警報発令、野草の受領方を相武台に連絡せるも、人出不足で受領困難という。止むなく、地元に駐屯の部隊や集団疎開児童に贈る。横浜市

市の分は発送する。

○全二日（土）初等科五・六年および高等科四ツ尾蔭取りの行軍。その結果、総量二二五キロを横浜戦災地に贈る。

○全四日（月）初等科五年以上、各部落の桑の皮むき作業に出動。

○全十一日（月）本日より一ヶ月間、初等科四年以上に農業動員を実施す。（全学区）

- 全十九日（火）農耕隊は連日、馬鈴薯の集荷作業に協力する。
- 全二十一日（木）初等科三年以上が軍の馬鈴薯の集荷作業に協力。高一男・初六男が学校農場の作業。
- 全二十七日（水）初五以上が報国農場の除草作業をし、甘藷苗をさす。高一男、防空壕掘り。
- 七月四日（水）空襲警報、P51八十機来襲、この日高等科一・二男子は富士フィルム工場に動員。
- 全十日（火）朝五時半に空襲警報次いで解除、この繰り返しで一日終る。児童は一部登校せしも途中で待避し帰宅せしむ。
- 全十二日（木）午後一時より市学徒隊結成式と市青少年団の発展的解消式が行われる。夜豪雨の中、空襲警報あり。
- 全十七日（火）雨。昨十六日より本日にかけて平塚市の空襲、その帰途一機が小田原の一部を空襲する。多古で一名死去。
- 全二十日（金）本日より二十日間、高一男女は石垣山へ軍の陣地工事に協力のため出動する。柳川勇吉訓導に召集令状が来る。情勢険悪との情報ありしたため急ぎ機具を横穴に搬入す。

- 全二十一日（土）暴風雨の中、講堂の罐詰の搬出を開始。
- 全二十三日（月）市内校長会が市役所で開かる。ご真影奉護のため協議。本校の横穴を視察し、これに決す。市内六校は、当分の間、本校内に奉遷することとなる。
- 全三十一日（火）一学期終業式を午前七時に挙行す。南口の壕が本日開通す。十五間の長さ。駐屯の兵隊も手伝う。
- 八月一日（水）二学期始業式。夏休みなし。
- 全二日（木）校長会（大窪小会場）で内藤事務官の「戦時教育令」説明会。四・六年は野草採集のため出動。昨夜より今朝にかけて六時間にわたる空襲で皆が疲労状態。
- 全三日（金）空襲警報が朝より出放し。一般児童登校せず。
- 全八日（火）晴。四ツ尾の学校林の下刈作業。
- 全十日（木）晴。連日の空襲で児童登校せず。本日より駐屯の突三七部隊は横穴壕の掘り方を始める。高一男に代って、小六男一〇二名が軍役出動。
- 全十三日（月）晴。今朝、小田原地方空襲。交通社

絶し混乱す。この日、上・下・小田原地方の被害は相当なり。国産電機・湯浅電池・富士ファイルム・新玉国民学校が被害。大雄山電車は、五百羅漢駅近くで襲撃され、近くの壕が崩れ、中に待避中の十三名が圧死。○全十五日（火）昨夜より今晚にかけて、小田原は空襲を受く。新玉・本町・城内の三校の学区。正午に、天皇陛下の重大声明の発表あり。一億の国民が虚脱状態に入る。

八月十五日正午、天皇は玉音放送されて戦争終結を宣し、国民とともに耐えがたきを耐え、凌びがたきを凌んで歩む決意を述べられ、詔書を発して軍事行動の停止を命じられたのであつた。それは、ポツダム宣言を受諾したことによる行動であるが、この宣言にもとづいて連合国占領軍は八月末いらい、日本の各地に進駐し、ポツダム宣言の諸条件を実施することとなつた。軍隊の武装解除は直ちに行われ、海外にいた日本人や軍隊を引き揚げ、東条英機ら戦争犯は逮捕された。連合軍最高司令部（G H Q）はまた、平和と民主主義を守るために、軍の独裁に反対して捕らえられていた政治犯人の釈放を日本

政府に命じ、治安維持法や特高警察など国民の自由を制限していたすべての法律や制度を廃止させた。続いて、婦人の解放・経済の民主化・教育の民主化などに関する項目の指令を発して日本の民主化を促し、戦争に協力して極端な国家主義、軍国主義をとなえた人々を公職から追放した。

ここでは、多古地区の敗戦後の対応・処理はどうであつたかを日記から抽出してみよう。

○八月二十日（月）富士ファイルム工場の学徒隊の解体式を行ふ。

○八月二十三日（木）農耕隊（隊長は内山中尉）に代つて駐留し、陣地構築を主とした突三七部隊が帰還につき、学校児童で見送る。

○全二十七日（月）壕内の物品を搬出し乾燥させる作業の実施。各教室の手入れ。配給物資の収納。

○九月一日（土）市吏員と憲兵が来校—各方面より講堂内の配給物資を取りにくる。

○全六日（木）本日、小田原地区に米軍進駐のため午前放課となす。配給の用紙を児童一人に一枚ずつ配布。市より罹災児童への見舞品到着。明七日より女教員及び初六以上の女子は休校となる。連合軍進駐のためな

り。当分休業の予定なり。

- 全 七日（金）本日より当分の間、米兵進駐のため初等科六年以上の女子と女教員は休校。
- 全 十九日（水）講堂より鮓・罐詰を搬出する。
- 全 二十日（木）戦時教科書の中で、占領下不適切と思われる箇所は削除して教えぬようにとの指示がでた。削除箇所は翌二十一年一月二十五日に明らかにされたが、この箇所を全国小学校児童が墨塗りしたのである。
- 十月二十五日（木）初五以上ドングリ収集。初三、四是蝗取り（五斗六升収穫、金三千円）、腸チフス注射。大岡国民学校疎開分団引揚げにつき初二児童が見送り、校長は駅まで見送る。
- 十一月一日（木）本日より玉宝寺の孤児二十五名を足柄国民学校に収容することとなる。これら孤児は、昨年八月二十七日より学童集団疎開をしていた横浜市大岡国民学校児童の中、空襲で帰るべき家なく、家族を失つて引きとり手のない子たちであった。（他の四十五名は、去る十月二十五日に帰浜している）、食糧はますます逼迫の折柄、農繁短縮七月を実施し、ドングリ拾い、乾燥甘藷ヅルの集荷をなす。
- 全 六日（火）進駐軍に提出用の名簿を至急作成。県

教育会配給の更半紙を児童に配給。日新農場の分割作業終了。甘藷ヅルの製品作業。

- 全 十九日（月）初一年、蝗取り。日新農場の麦の播種。運動場にも播種す。

○十二月二十日（火）市制記念日。市長寄贈の蜜柑配布。疎開学童に、お年玉として野菜・衣類を贈る。

○全 三十一日（月）修身・歴史・地理の三教科書の回収指令が出る。回収して不足の製紙原料として再生されたが、世界の教科書歴史に全くない処置であつた。

○昭和二十一年一月一日（火）新年拝賀式。疎開児童に切餅を相当量贈られる——富水地区各位の温かい配慮によるものである。

○全 一月十日（木）本日、二回目の餅を集め、校内及び五百羅漢の疎開学童に贈る。

○全 一月二十日（火）児童の栄養失調の調査と虱のD DTによる退治を行う。

○全 一月二十五日（日）戦時教科書の削除箇所が明示され、「すみぬり教科書」が生れる。四月から暫定教科書のできるまで使われた。全文削除では、初等科一年の「兵タイゴツコ」、五年で「海軍のにいさん」、「菊の花」、「神だな」、「にいさんの入営」、「金しくんしよう」

など。算数でも、鳥居やお宮などの文字をはじめ、国土や戦時に関係した数などが削除された。戦時下の教科書で超国家主義・軍国主義思想によつて編集されたものまたは神道思想を教えるようなもの、あるいは戦後の国情に合わない内容のものは、すべて墨ぬりとなつた。

- 昭和二十一年二月九日（土）御真影の奉遷を申し上げる。初四以上は、食糧増産堆肥積込用として落葉かきを実施する。
- 全 二月十六日（土）G H Q の指令により、廃棄教科書の収集が完了する。

こうした情勢の中で、十月十一日のG H Q の指令たる「社会改革の五大指令」が出たが、同二十二日には同指令の一項たる「日本教育制度二対スル管理政策」が出て、本格的に占領軍は日本の教育改革に着手した。軍国主義教育の追放、退役軍人の教職従事の停止、神道教育の排除、修身・国史・地理の授業停止、教科書破棄と新教科書作成、奉安殿・校内神社・神棚の除去、教育勅語の奉読廃止、戦争関係図書、国体に関する書籍の焼却、武器などの撤去指令の通達が相次いで出された。そして二十三年六月十九日には、衆参両院で教育勅語・詔書等の排

除が決議され、その二十五日には、これら勅語・詔書の扱いについて文部省通達が出て、新教育がその途についた。アメリカ教育使節団報告書に基づく六三制として教育改革の進展である。

（平成元・九・十二完稿）

## 十八、戦後の自治会の歩み

自治会長 中 村 勇

自治会の移り変りをとのことで、私なりに感じとつたことを記してみます。

昭和十五年九月の内務省訓令部落会・町内会等整備要綱で制度化されました、政府の方針・伝達は、防空などを任務とした十戸前後の国民総動員体制の末端組織が隣組制度であり、それが実施されたわけです。戦前を知る方々には色々と思いつかれると思います。わからない点が多いのですが、戦後の自治会の歩みを思い出して見ますと多古は三七〇世帯と聞かされ、四十三年の年月が過ぎております。現在自治会加入世帯は八四〇以上になります。未加入世帯もありますが、小田原市の中で大手の自治会にまで成長しております。ここに小田原

市の自治会の概要と組織を記し参考にしたいと思います。

昭和二十七年、平和条約の締結と共に自主的な住民組織が全国各地に誕生しました。小田原市も住民組織確立の気運が高まり、昭和三十一年地区広報委員会を通じて、市に対し住民組織結成の指導が要望されました。戦時中の町内会等と異なり、あくまでも地域住民の盛り上がりを待つて考慮するとし、その後機運も熟し、各都市の経過を調査するなど検討の結果、自治会設置要綱・自治会規約案・考え方の基準となるひな型を地区広報委員会に示し、その結成については地区の実情に応じた自主性にまかせた。やがて昭和三十三年に至り市内各地区に住民の総意による自治会の結成が進められ、同年七月に全市域に一六三の単位自治会ができました。また、二十二地区ブロックに連合会が設けられ、さらに三名の世話人を置いて運営する事になりました。その後、昭和三十七年四月に小田原市連合自治会が組織され、昭和四十年十二月、その名称を小田原市自治会總連合と改め、現在二十五の地区連合自治会と二四三の単位自治会で組織されています。なお自治会長は市の地域行政および公金を取り扱う事から、市では地区嘱託員に委嘱しています。この様に組織がなされていますが、四十四区の戦後から今日

までの歩みを私なりに記させていただき、歴代役員の方々のご紹介とご苦労に対したいと思います。戦後の名称も占領下の為か、二転三転もして区内の取りまとめは白山講でおこなわれたのが始めとなつております。以下、昭和二十一年一月からの多古区役員名簿を参考にして記しますが、役員の敬称は略します。

初代 昭和二十一年一月～同二十一年十一月

白山講 講元 津田茂三郎  
副講元 中山政平

二代 昭和二十一年十一月～二十三年一月三十一日

戸主組合 組合長 中山市蔵  
副組合長 中山房太郎

三代 昭和二十三年二月～二十五年三月三十一日

自治組合 組合長 山田甚蔵  
副組合長 中山政平

四代 昭和二十五年四月～二十七年三月三十一日

自治組合 組合長 中山光太郎  
副組合長 中山政平

五代 昭和二十七年四月～二十九年四月三十日

自治組合 組合長 中山政平  
副組合長 中山守之

委員 下田顯三 村山啓造 柏木平吉 荒井光雄  
 下澤連蔵 上原理平 磯崎峰雄 中村英治  
 中山友三郎 土屋正夫 小笠原潤平 原安五郎  
 中島稻之助 田渕角三  
 昭和二十九年五月～三十一年七月一日

六代 自治組合 組合長 中山光太郎

副組合長 上原理平

副組合長 下田顯三

委員 中山福松 中山友三郎

村山啓造 機崎峯雄

星崎幸太郎 下澤連蔵

柏木平吉 城所吉五郎

田渕角三

この年代は多古地区としまして特記しなければならない大事業がおこなわれました。山の上に在った白山神社を現在の場所に降ろした仕事だと思います。関係役員の方々のご苦労に感謝申し上げます。

七代 昭和三十一年七月～三十三年三月三十一日

区長 中島稻之助

副区長 上原理平

委員 城所吉五郎 内藤隆正

委員 下田顯三 村山啓造 柏木平吉 荒井光雄  
 下澤連蔵 上原理平 磯崎峰雄 中村英治  
 中山友三郎 土屋正夫 小笠原潤平 原安五郎  
 中島稻之助 田渕角三  
 昭和三十三年四月～三十五年三月三十一日

一六三の単位自治会が設置され、多古も自治会の名称となり、中島自治会長の下にて発足致しました。  
 昭和三十三年四月～三十五年三月三十一日

自治会長 中島稻之助

副自治会長 上原理平

委員 村山啓造 添田春原<sup>もと</sup>  
木村重吉 柏木平吉

上原政吉 磯崎峰雄

機崎武雄 土屋正夫

この頃は公民館建設の大きな事業の時もあり、中島自治会長は公民館長も兼任されていました。三十三年に公民館建設の話がなされ、三十四年九月新築落成となりました。木村重吉氏が館報に当時の事を記載されていますので書いて見ました。三十三年度新役員にて建設が取り上げられ、その年の八月、暑い日でしたが、役員一同にてモデル公民館として評判の高かつた緑・万年の両館を見学し設計の資料とし図面が出来ました。この図面に

より区民総会で計り、区民の同意により建設が決定されました。

自治会の委員と財産区の議員が建設委員となり工事の着工を見ました。建設資金については財産区配分金・区内寄付金・旧公民館建物売却金等が当てられ、木材は区の先輩の方々のご苦労された立派な建築材となつた足柄財産区共有林の払下げを受け、この木材の搬出製材は下田製材に便宜を計つていただき、製材の補助員として建設委員が日曜ごとに奉仕しました。建設に当たつて藤沢大工さんはじめ区内の方々にお願いする事になり、工事費の支払いは会計の村山啓造氏、木村重吉氏が当たりました。建設資金も充分でなく銀行の借入その他で計算に夜の過ぎるのを忘れた事が思い出されます。寄付金の目標額も区民の皆様のご協力で達し、建設工事も順調に進み、三十四年五月には上棟式が挙行できました。また、建設中に暴風雨に見舞われた事もあり、苦労も致しました。落成も間近になり備品類等ご寄付願うことになりました。区内の方々、各種団体、外部の有志の皆さんから椅子、テーブル等ご厚志がよせられ、立派な公民館が完成しました。これは区民の皆様のご熱意によるものでありまして、ほんとうに一つの事業をすることは、大変なことでありますと改めて関係各位のご努力に対して感謝を申し上げ

る次第であります。

八代 昭和三十五年四月～三十七年三月三十一日

自治会長 山田甚蔵

副自治会長 上原理平

委員 木村重吉 星崎幸太郎

城所吉五郎 米山周蔵

村山啓造 磯崎武雄

土屋正夫 田渕角三

公民館長中山光太郎氏は「小田原市で四十八番目の多古公民館はどこの公民館より優れている。初代館長中島稻之助氏のご努力に感謝申し上げ、多古四百世帯の方がたの文化活動の中心になる事が大切だ」と言われています。また自治会長山田甚蔵氏は大変喜ばしい事で公民館活動が一步前進したと申し上げたいとし、自治会と公民館を切り離す事にご理解を得、区民の皆さんの区費より充分とは言えないが相当額の運営費が計上出来たことは区民のご理解の賜と感謝しています。小田原市に新生活運動が起つて十年余になりますが、残念ながら運動の推進がなかつた事、今後の活躍をお願いしたいとしております。

九代 昭和三十七年四月～三十九年三月三十一日

自治会長	上原理平
副自治会長	下田顯三
委員	加藤栄造 上原政吉
	磯崎武雄 立木弥太郎
	中山朗 中山春雄
昭和三十九年四月～四十一年三月三十一日	
自治会長	上原理平
副自治会長	下田顯三
委員	加藤栄造 上原政吉
	磯崎武雄 下澤連蔵
	立木弥太郎 田渕角三
	中山朗 中山春雄
上原自治会長は左の様に話されています。皆様もご承知の通り小田原市内で最も悪い道路と称されていた消防北分署前から小田急ガード下までの道路改良工事たる小田原山北線は昭和三十六年度から着工され、漸く昨年の十二月全部の替地および登記等の事務整理が完了致しました。思えば永い期間にわたって沿道の関係者に迷惑を掛けましたが、皆様方のご協力に依り現在の立派な道路が完成しました。この工事も思えば大変な仕事にて関	

係の皆様のご努力に感謝申し上げます。また、各組の呼名について改正もされています。「一の一」とか「一の二」のようになつてゐるもの、「一二三」と一連の呼名に改正すべく善処すると言つております。国勢調査に依りますと、七百世帯に近づいたとも書かれ、何と言つても高速发展化處理場の問題もこの時期だったと思ひます。この建設に対しても区内色々な中で大変な苦労があつた事と思います。

十代 昭和四十一年四月～四十三年三月三十一日

自治会長	下田顯三
副自治会長	村山啓造
委員	加藤栄造 下澤連蔵
	磯崎武雄 田渕角三
	中山春雄 内藤隆正

この時の下田自治会長さんは区内の事情に対してこの様に話しています。ご承知の通り最近における当区の現状に対し都市化に依る急激な住宅の増加、また、人口は勿論、従つて土地開発による道路改修や建設に、昼夜を問わず、あらゆる問題は自治会を中心取り巻き、これ等の問題は非常にむずかしく一朝一夕に解決する様な事

業ではありません。一つ一つを良く理解し実現に努力し、合わせて協力を願いたいとしています。区内の発展と共に色々な問題が感じられます。

十一代 昭和四十三年四月一四十五年三月三十日

自治会長 村山啓造

副自治会長 内藤隆全

委員 下澤連蔵 中山幸太郎

田渕角三 城所吉五郎

村瀬菊雄 岩本朝久

加藤栄造 中山春雄

昭和四十五年四月一四十七年三月三十一日

自治会長 村山啓造

副自治会長 内藤隆全

委員 下澤連蔵 加藤栄造

中山春雄 中山幸太郎

城所吉五郎 小林 勇

村瀬菊雄 岩本朝久

村山自治会長に白山神社の玉垣の話を聞いた事が有ります。色々な意見が有り完成するまで大変な様でした。

しかし現在立派な形で神社の美観となつております。また、他にも大きな問題が出て来た時期でもあると思いま

す。村山さんは区内の道路も関係者の協力で幹線の大部分は完成し、今後は枝線について市当局へ請願していきます。二五五号の新道工事が着々と進められ、秋には立派な道路の完成が見られるとされています。下水道終末処理場の話もこの時期でありました。館報に当時の事が記されています。県の企画で上郡地区の工場排水並に下水道終末処理場を当区三丁河原に建設した旨の申し入れがあり、心外の計画でもあるので緊急役員会並に区民総会を開きその対策を慎重審議した結果、満場一致建設に絶対反対を決議された。その理由として先年、小田原市が同地区に建設した高速化学処理場についても、今日に至るも住民の納得する完全な施設を見ておらず、付近住民が迷惑している。また、当地の発展を阻害するものと断定されています。従つてこれに対して対策委員も選出され、自治会役員と共に反対運動を進めて行くことになりました。地主の皆さんも如何なる交渉にも応じないと心強い発言もあり区民の皆様のご支援をお願い致しますと記されています。思えば当区にとつて大変な問題の始まりとなりました。反対運動の会合も数が多くなり、その中で町内の防犯灯の設置にも力を入れられ町内は一段と明るくなりました。

十二代 昭和四十七年四月～四十九年三月三十一日

顧問 村山啓造

自治会長 内藤隆全

副自治会長 下澤連蔵

委員 村瀬菊雄 中山春雄

門馬 勇 及川良久

城所吉五郎 小林 基

中村 勇 石川欣平

村山啓造

自治会長 内藤隆全

副自治会長 下澤連蔵

委員 村瀬菊雄 木村暉雄

門馬 勇 及川良久

城所吉五郎 小林 基

中村 勇 石川欣平

中山春雄(八月九日死亡さる)

十三代 昭和五十一年四月～五十三年三月三十一日

自治会長 下澤連蔵

副自治会長 村瀬菊雄

委員 石川欣平 門馬 勇

されており、その委員会の立場において絶対に会合はもたないと固い意見を表明し現在に至っています。その理由については、三十八年十二月に具申書を市と取りかわし、その一項に住民の好まざる物は他に建設をしないと約束をしています。また、反対委員全員で市長に陳情した結果、市長は責任をもつて絶対に建設はしないと約束をしました。しかし県は計画を変更していながら現況で色々な方法で交渉を考えるので一層のご協力とご理解を願いたいとしております。また、酒匂川取水工事の説明会の申し入れもこの頃にありました。五十年一月二十八日の総会にて反対委員長が村山啓造氏に交替となり、自治会反対委員会の一本立が出来たがこの時期は下水道処理場の問題が一番大きな事だつたと思います。区内では白山神社の祭礼に自動車による仮設舞台にて演芸等もおこなわれた。また、長年自治会の役員をされた中山春雄氏が死亡されていますが心からご冥福をお祈り申し上げます。

内藤自治会長は館報にこの様に書いています。下水道終末処理場の建設について県が扇町六丁目に計画立て自治会に対し市を通じて説明会をひらきたい旨の連絡がありました。自治会は四十六年に建設反対委員会が結成

及川良久 江藤常雄

中村 勇 中山康男

山室 清 清水 昇

昭和五十三年四月～五十五年三月三十一日

自治会長 下澤連蔵

副自治会長 村瀬菊雄

委員 及川良久

門馬 勇

中村 勇

山室 清

中山康男

を法の上で計画決定し誠に残念無念です。以来反対委員会は正に連日連夜これが対策に腐心しました。その結果、五十二年二月、臨時区民総会において客観的情勢その他を判断し建設される事を前提とした対策委員会に切り替えたわけです。対策委員会も十分過ぎる程に協議を重ねました。反対運動が無残な敗北に終つたことは事実です。

この事実を良く考え、また将来を考え、熱心な討議を続けました。そこで県市に対して要望書を提出する事を決めました。対策委員会の中に分科会を設け、地権者部会・公害対策部会・環境整備部会が出来ました。各分会において種々思索を練りそのまとめを急いでいるのが現状であります。去る四十六年以来、区民の総意として絶対反対の運動を続けて來たが、五十一年に至り県は之を都市計画法により所謂法によつて推進する事になりました。頑固な団結で反対運動を展開したにもかゝらず、遂に計画決定されたのです。この事について考えてみますと、五十一一年八月二日、小田原市都市計画審議会は市長に対して三丁河原に終末処理場を建設する事を了承した。同年九月七日県の地方都市計画審議会も知事に対し同じ様に了承する解答をしました。同年十月一日、県は建設大臣の許可を得て流域下水道の終末処理場として三丁河原

終末処理場問題について下澤自治会長は館報に記しています。去る四十六年以来、区民の総意として絶対反対の運動を続けて來たが、五十一年に至り県は之を都市計画法により所謂法によつて推進する事になりました。頑固な団結で反対運動を展開したにもかゝらず、遂に計画決定されたのです。この事について考えてみますと、五十一一年八月二日、小田原市都市計画審議会は市長に対して三丁河原に終末処理場を建設する事を了承した。同年九月七日県の地方都市計画審議会も知事に対し同じ様に了承する解答をしました。同年十月一日、県は建設大臣の許可を得て流域下水道の終末処理場として三丁河原

います。その一つに、地域の環境悪化を防止するような施策を積極的に推進し、施設は公害除去及び外観等に留意して住民と関係者が精神的肉体的被害を受けないよう配慮すること、地元要望に誠意をもつて対処し、かつ生活基盤整備に留意することとあります。審議会の出した付帯意見は要望の権利をあたえたものであると私は信じます。また、県市は私達の要望を誠意をもつて受けとめる義務が有ると信ずるとしておられます。今日の四十四区の変貌の元であり、大変な事にて感謝申し上げます。

十四代 昭和五十五年四月～五十七年三月三十一日

自治会長 村瀬菊雄  
副自治会長 磯崎武雄  
委員 内藤匡博 江藤常雄  
山室 清 中山康男  
清水 昇 神尾信重  
中島正雄 岩田 保  
小林美庭造(中山康男辞任により)  
國原秀男(岩田 保死亡により)

この年度は公民館の新築と神社の修理等が行われた年でした。村山啓造氏は旧公民館の想い出として、小田原市内で三十八番目の公民館が昭和三十四年の秋、総工費

約二五〇万円で立派に完成し、また、境内の駐車場も広く市の公民館としては、すべての点で一番勝れていると自負出来ると言われています。然し建設にあたっての資金の捻出に苦慮されたようです。自治会で公共施設にのみ使用すべく蓄積された財源では足りず、約三分の一の金額は区民の皆様のご芳志を仰ぎ、資材は財産区が管理する百余町歩の山林から入手の努力の結果よい条件で坊所山の桧林の一山の移譲が出来て、関係者による伐採作業等、製材は上多古の下田氏に一任され、大工は下多古の藤沢氏と決まり、関係の皆さんのが献身的努力により落成の運びとなりました。落成式のよろこびが目に見える様です。その公民館も二十一年の年月を経て多古も変貌の時となりました。酒匂川流域下水道右岸終末処理場建設に伴ない、県および市に対しても要望書を提出し、その周辺整備対策の一環として五十五年八月完成の予定で鉄筋コンクリート造りの新公民館の建設が進められました。また、神社の修理の話もおこり、当時白山神社の損傷も多く見られ、特に屋根の雨洩り箇所も多く、この修理に関し区民関係者のご賛同も得られ、全面的に修復する事に成りました。財源は多数の方々のご芳志により確保も出来て一新した立派な社殿となりました。公民館と

神社とご努力をいただきました建設委員のご氏名を記載致します。

建設委員長	下澤連蔵	加藤栄造
委員	上原理平	磯崎峯雄
	村山啓造	磯崎武雄
	村瀬菊雄	中山一櫻
	磯崎武雄	石川欣平
十五代	昭和五十七年四月～五十九年三月三十日	
自治会長	磯崎武雄	
副自治会会长	石川欣平	
委員	中島正雄	柳沢國計
	小林美喜造	磯崎莊覚
	村越勇吉	磯崎眞一
	國原秀夫	中山 彰
昭和五十九年四月～六十一年三月三十日		
自治会長	磯崎武雄	
副自治会長	中村 勇	
委員	中島正雄	柳沢國計
	磯崎莊覚	小林美喜造
	磯崎眞一	江藤常雄
國原秀夫	中山 彰	

この頃の大きな仕事は、何と言つても懸案だった神社裏の石積み工事でした。既に公民館も新築され神社の修理も屋根を銅板とし内外装も完成され、一新した中で残された工事は石垣の石積みとなりました。たまたま玉宝寺のアパートが取潰される事になり、工事には一番良い時となり、区民総会を開催して、区民の承認も得られ、関係役員の皆様の協力により工事費等は先輩が残された財産区の配分金と祭礼の残金をあて九月竣工、十月九日完成、と二百四十七万余円の費用にて米山組のご尽力により立派な石積みが完成しました。白山神社境内も完全に整備が出来、区民のいこいの場となつております。この時期は二川地区が防犯モデル地区に指定され、一年間の防犯活動にはいりました。推進協議会も出来、当区でも四十名の推進委員が選任され、小田原警察署防犯協会防犯指導員の指導により、数々の活動が行われました。白山中学校運動場での式典、神奈川県警察音楽隊によるアトラクション等で防犯思想は高まりました。防犯県民のつどいでは二川地区連合自治会として表彰の栄を受けました。自治会では現在でも防犯パトロールと自転車指導整理は実施いたしております。

十六代 昭和六十一年四月～六十三年三月三十日

自治会会长	中村 勇	一、社殿 本殿流れ造り 間口一間四尺五寸
副自治会会长	中島正雄	奥行一間二尺 幣殿一・一七坪
委員	江藤常雄	磯崎莊覚 柳 実 磯崎眞一
		拜殿六坪 向拝一・三三坪
自治会会长	中村 勇	一、境内坪数 二五八坪
副自治会会长	中島正雄	一、由緒概要 新編相模風土記稿に白山社は村の鎮守なり 本地仏正觀音を安んず 例祭は九月十五日とある。
委員	江藤常雄 中山 功	古くより村の鎮守として尊崇され、明治六年七月二十日、白山神社と改称。村社に列格され大正四年十一月十二日、神饌幣帛料供進神社に指定せらる。同九年の足柄小学校増改築工事により、丘陵上に孤立せし社殿を境内の整地とともに土地引下げの工事をなし遷座し奉る。時に昭和三十一年七月一日なり。
柳 実 高橋 保	中山 馨 中山 馨	と記されております。初詣は氏神様からと六十二年元旦に初めて実施する事になりました。玉宝寺は前々から初詣が行われており、住職の安藤実英師に相談したところ、非常に喜んでいただき、清酒二斗樽の寄贈までいただき、区民の皆様多數の参拝にて盛大に出来ました。また、この年は神社にある仮像の保存の話が神社総代よりあり、調査消毒等の話し合いももたれ、費用方法などをどうするか、むずかしい問題となりました。たまたま市にこの話をしたところ、調査消毒までも了解が得られ、
一、鎮座地 小田原市多古六六九番地	一、祭神 伊弉諾尊	一、例祭日 十月九日

区民の皆様のご理解とご協力に対しお礼を申し上げます。神社の祭神はどんな神様なのかと言う事を聞き、神社の案内板の設置をする事にしました。資料に関しては大変野頼先生にお世話になり、神社総代、先輩の皆様のご協力をいただき立派な案内板が完成しました。

七月四日、成城短期大学教授清水眞澄先生外県市六名の担当のお出でをいただき指導を受けました。調査の結果は私共が仏像と思つていた像が神像で有る事や、四五〇年ぐらい前の物である事もわかりました。消毒もすみ、現在神社内に安置されています。六十三年九月には昭和天皇の発病との事にて、十月九・十日の神社祭礼の取扱いについて神社総代、公民館役員他関係の方々にて祭礼自粛を決定し、ご平癒下さる事をお祈りいたしました。

この様な事は自治会初めての経験にて区民の皆様のご理解に感謝申し上げます。ですが残念ながら新年早々七日に天皇陛下崩御の悲報に接し心よりご冥福をお祈り申し上げました。新元号も平成ときまり、新たな気持ちを痛感したことは今でも忘れません。区内を見る時に大きな工事が進行中にてご不便ご迷惑をかけている事と思いります。ご理解とご協力をお願ひするものです。五年越しの要望でありました上多古地区小田急ガードの歩行者隧道も工事が進行中です。市道〇〇〇九道路も改良され、立派な歩行者道も出来ました。土手のお地蔵様も新築の家に移り区内の安全を見守っております。また、飯泉橋より寿町に向かう土手道も改良工事が始まり、桜の花の咲く頃（平成二年三月）には完成します。先輩諸氏のご

努力により下水道研修センターの新築工事も扇町六丁目地内に立派な姿をみせております。十二月二十五日には、多古しらさぎ会館の愛称にて開所される事になりました。区民の皆様の利用をまつています。国道二五五号においては歩道改良工事も進行中で、来春にはすばらしい歩道が完成されます。その他、色々ありますが、行政と連絡しながら一つ一つ区民の皆様のご期待に添うよう努めいたします。不勉強の身で戦後四十三年間の多古の歩みを記しましたが、それぞれの年代のご労苦により現在の四十四区があるのだと痛感する者です。ここに先輩の方々を記しましたが、その年代のご参考になれば幸いと各位に感謝申し上げ、区民の方のご参考になれば幸いと思いつつ筆をおきます。

（平成元・十二・十完稿）

## 十九、多古公民館活動の三十年

公民館長 土屋治郎

### 1、はじめに

多古の丘陵上に白山社が鎮座していた頃、その西の青年会場は、区民の寄り合いの場として、また、青年が穴

部壠の改修や神社の祭典などの相談をしたり、二川小学校の石塚政治校長の指導で、謡曲・俳句・短歌や修養講座の会を持つなど、よく利用していた。それは、高所にあることや部屋が狭小である欠点を克服してのものであった。

敗戦後の昭和二十三年四月、区長の山田甚蔵氏は、区民念願の平地の公会堂を現消防署分署の隣りに建設し、区内の寄り合いの場として運営をした。当時、青年の中村勇氏（現自治会長）は、学校や青年団文化部と相計り、多古仲よし子供会をこの会場で結成したのは、同年同月であつた。戦後の荒れた世相の中で童話会、市図書館の幻灯機を借りての映写会あるいは読書会を開くなど豊かな心の育成に尽力したのは、画期的な公民館活動のはじりともいえましょう。

多古公民館活動が組織的に動いたのは、公民館新設の昭和三十四年四月からといえるので、以下、この三十年の歩みを役員の顔ぶれを主にして述べてみましょう。

## 2、模索から脱皮して

（昭和三十四年～同四十一年）

多古公民館が新築落成した昭和三十四年には、多古地

域の世帯数は四〇〇余となり、小田原市で四十八番目の公民館の設立ということになります。

九月に落成したこともあって、初代多古公民館役員は、翌年三月末までがその任期であります。

○昭和三十四年度（九月～翌三月）（氏名は敬称略）

館長 中島稻之助 副館長 上原理平

会計 磯崎武雄・添田春原

今は既に亡き初代館長となられた中島稻之助氏は、明治の人の佳き気風を宿していたといわれ、もともと実直な性格から不慣れでもあつた公民館活動に、ひたむきに熱意を注がれ、補佐する他の役員とともに、僅か半年ほどの中に、それなりのレールを敷かれました。

九月二十六日に中部地方を襲つた伊勢湾台風は、死者五、〇四一人。被害家屋五十七万戸の災害をもたらしました。

明治以降、最大の被害とされております。歳末も迫る十一月二十七日、安保改定阻止の第八次統一行動は、デモ隊二万人が国会周辺に突入した騒然さが残る年でもありました。

しかし日本経済は岩戸景気と称して湧いた活況の年でもあったことも記憶に強く残ることであります。

○昭和三十五年度

館長 中山光太郎、副館長 中島稻之助・加藤ヤエ

会計 中山政平・内藤隆全

○昭和三十六年度

館長 中山光太郎、副館長 中島稻之助・内藤隆全

会計 中山政平・加藤栄造

初代館長中島稻之助氏は副館長に退いて、代わって会長を引き継いだ中山光太郎氏は、意欲をもつて公民館の運営に当たり、役員始め地区民の協力を得て、昭和三十六年八月、多古公民館報を創刊した。充実した公民館活動の内容の広報活動でもあつたが、市内の多くの公民館が注目し、運営の資料として寄贈を求められたのであつた。が、公民館活動の日の浅いこともあつて試行錯誤の連続であったように思われました。それでも多古公民館の環境的に恵まれたメリットは、他の公民館活動に比べれば、好都合の条件もあつて、地域住民が活用する公民館であつたように思われたことでした。

○昭和三十七年度

館長 木村重吉 副館長 米山周蔵・加藤ヤエ

会計 添田春原・内藤匡博

新たに選出された木村館長・米山副館長は、フジフィルム会社や学校の副校長といった組織の中で活動されてきた体験から組織運営はどうあるべきかの理想もあつたようで、それを生かすべく努力された二年間の活動であつたといえるでしょう。

—338—

会計 添田春原

初代館長だった中島稻之助氏が返り咲いた選出の事情があつたことでした。一つには初代館長としての任期が短かつたこともありますが、何としても地区民の要望を直接受けとめる人望の厚さによるものであつたと思われました。それに応えるように地道な活動を開催された二年間であります。

人は自己の考えを持ち、また主張することは大切なことです。が、特に公共活動の場合は、個人の主張が全体とのかかわりあいに調和が得られないとき、その進展は覺つかぬものとなりましよう。船頭多くして船山に登るの愚をくり返さぬような運営が肝心であると思われます。

○昭和三十九・四十年度

館長 木村重吉 副館長 米山周蔵・加藤ヤエ

会計 添田春原・内藤匡博

新しく選出された木村館長・米山副館長は、フジフィルム会社や学校の副校長といった組織の中で活動されてきた体験から組織運営はどうあるべきかの理想もあつたようで、それを生かすべく努力された二年間の活動であつたといえるでしょう。

館長 中島稻之助 副館長 木村重吉・加藤ヤエ

会計 添田春原・石川欣平

○昭和三十八年度

館長 中島稻之助 副館長 木村重吉・加藤ヤエ

活動に対する熱意も公民館活動により刺激を与えて下さつたようになります。

この期間は、きめ細かい組織運営がなされ、小田原離子保存部を始め、教養部・青年部・婦人部・児童少年部の各活動、親老会や四季を通してのレクリエーション大会、更には郷土の歴史講座・農業や自動車運転技術習得などをも公民館報にのせられた運営は好評であつたと思われます。

#### ○昭和四十一・四十二年度

館長 上原理平 副館長 加藤ヤエ・小笠原精一

会計 中山幸太郎・内藤匡博

ここで選出の館長上原理平氏は、初代の副館長をつとめた方であります。古くから自治会長などの仕事もされた実務派の方であつたといえましょう。その故か、二年間の公民館活動は、地域社会に密着しての手堅い歩みとなり、一つの枠組と独自性が固まつたときと言えましょ。

#### 3、よりよい公民館活動を求めて

(昭和四十三年～同五十四年)

○昭和四十三・四十四年度

館長 下田顯三・副館長 小笠原精一・神原昭子  
会計 内藤匡博・中山朗

#### ○昭和四十五・四十六年度

館長 下田顯三・副館長 及川良久・中山朗

会計 小沢勇・中山一楼

この四年間を続投された下田顯三氏は、館長に選出されたことを誇りと思い、自らの経営感覚を生かし、公民館の活用、地区民の親睦の場とすべく心を碎かれようで、新しい時代の息吹きを役員と計つて、いろいろな企画と模索をされた。

地区の先輩の敷いたレールを大切にしながら、次の時代へバトンタッチをしたことは確かなことです。

四十三年といえば、東京オリンピックから、次の開催地メキシコで、第十九回オリンピックが開かれた年であります。

国内では、昭和元禄といった言葉が流行し、日本経済のG.N.P.、つまり国民総生産が西独を抜いて自由世界二位となつた年で、対米貿易收支も黒字となり、現在の対米貿易摩擦が発生した原点の年となつたといえましょう。

この秋深き十月には、日本武道館で明治百年記念の式典が開催された年でもありました。

○昭和四十七～五十年度（四か年）

館長 村山啓造 副館長 加藤栄造・小笠原精一

会計 中山一桜・後藤恒雄

地域社会に密着する方向性は、公民館運営や公報活動にも洗練さが加わり、子ども会の各行事、ラジオ体操・水泳講習・納涼盆踊り大会・球技・ハイキングや趣味教養活動としての図画・習字・園芸など、きめ細かな活動をされたことは、地区民と公民館との距離をより近づけたといえましょう。

この四か年の主な活動は次のようです。

- 5月7日 菊鉢腐葉土の配布（文化部）  
同 28日 公民館花壇植樹・美化作業（厚生部）  
6月1日 TBSテレビ（家族そろって歌合戦）に、  
小田原離子多古保存会が出演。  
同 11日 料理講習会（婦人部）  
7月2日 菊花講習・菊苗（文化部）  
8月3日 史跡めぐり（婦人部）  
同 4・10日 水泳教室（白山中会場・児童少年部）  
同 11日 どじょうつかみどり大会（企画部）  
同 13・14日 盆踊り大会（公民館）  
22日 子ども会リクレーション（児童少年部）

9月15日 敬老会講演会（講師立木望隆氏）

同 16日 第二回小田原市公民館大会で、小笠原精一  
氏が優良役職員として表彰さる。

11月3・4・5日 多古公民館文化展覧会開催  
同 23日 関東祭り離子大会に優勝の祝賀会  
(小田原離子保存会)

同 28日 自治会・公民館役員の懇親ボーリング大会  
開催（体育部）

1月13日 小田原離子太鼓初め（保存会）

4月上旬 サンフランシスコへ、小田原離子保存会が  
演奏に出向く

○昭和五十一・五十二年度  
館長 加藤栄造・副館長 城所吉五郎・小笠原精一  
会計 磯崎徳治・星崎政興

○昭和五十三・五十四年度  
館長 加藤栄造・副館長 中山一桜・石川欣平  
会計 磯崎徳治・国原 実

新しい館長に選出された加藤栄造氏は、家族あげての  
地域活動への理解と熱意から自負心をもつて臨み、他の  
公民館と連携活動や公民館情報に熱情を注がれた。また、

行事や催しごとへの熱意は、小田原離子が市の褒賞条例第一号を手にし、また役員山室一忠氏が小田原市優良公民館役員賞に輝きました。

顧みて、この中期の十一年間は、地区民の公民館活動への積極的な参集を通して、各館長および役員の個性的活動が反映されて、よりよい伸展をもたらした期間であつたとの評価もでき、ここに多古公民館の独自のカラーと搖るぎない連帶意識が定着したといつてよいのではないかと思います。

五十二年度の主な活動は、次のようです。

- 5月22日 市子連子ども大会（城山競技場）
- 6月5日 学区対抗ソフトボール、ポートボール大会  
（白山中校庭）
- 同 26日 バザー
- 7月4日 レクリエーション「酒匂川で遊ぼう」
- 同 10日 市子連「ソフトボール大会」
- 7月23日 水泳教室（芦子小プール）
- 同 27日 水泳教室（白山中プール）
- 8月1～20日 ラジオ体操（白山社・東電前広場）
- 同 5・6日 青少年の家（塔の峯キャンプ）
- 同 14日 盆踊り大会（白山社境内）

同 21日 サイクリング（酒匂川沿い）  
9月4日 健民祭（白山中校庭）  
10月9日 白山神社祭礼

同 23日 ソフト、ポートボール新人戦  
12月4日 足柄学区ソフト・ポートボール親睦の大会  
2月19日 六年生を送る会（公民館）

#### 4、時代の変容と多様性をとり入れて (昭和五十五年～平成元年)

多古公民館としてのカラーは、五十五年度に至るまでに固まつたと見られ、その後の他地域からの環境的羨望と地域公共活動への高い評価の一つには、これまでにかかわつた役員および地区諸先輩の熱意と労苦によることが大きかつたことは、言を待ちません。

昭和三十四年に落成した多古公民館は、県公共下水道右岸処理場建設に伴う地区住民対策として、県側の情勢とともに人口の増加もあって、耐久性が弱く、遂に昭和五十五年に改築して現在の鉄筋構造の偉容のある公民館の出現となつたわけであります。

○昭和五十五・五十六年度  
館長 石川欣平 副館長 小林 勇・中村 勇

会計 土屋元治 阿久津 馨

新装なつた公民館は、旧館に比して空間も広く、子ども会の作品百八十点の展示とともに、絵画に意欲を持つた成人の方がたの作品五十点の展示もなされ、趣味教養の俳句・書道の会・バザーの開催・盆踊りなど地域社会の親睦の度は増し、特技を持った地区の教養人の講座も実施されて、地域文化の向上伸展に成果を挙げたとの好評を得たことでした。

小田原囃子多古保存会は、神奈川県指定無形民族文化財として評判も年とともに高まっているが、その五十五年度の行事は次のようです。

4月 お城まつり実行委員に委嘱され、前後6回出席する。

5月3日 第十六回お城まつり大名行列に少年部を中心45名が参加する。

同 4・5日 大稻荷神社祭典に銀座自治会の要請を受けて山車にて出演する。

6月10日 全国教職員組合福祉部会の総会に出演。

同 13日 神奈川県消防協会の総会に出演し、県知事・県議会議長より賞辞を受く。

同 18日 全関東時計商組合の総会に出演。

8月10日 小田原商工会議所総会に出演。

同 13・14日 公民館主催の夏祭りに出演。

同 21日 小田原明るい社会づくりの会の夏まつりに出演。

同 30日 公民館落成記念こけらおとしに出演。

9月15日 敬老会に少年部出演。

同 21日 足柄学区健民祭に出演。

10月8・9日 白山神社祭典に出演。県より文化財としての記録保存のために来会し撮影。

同 26日 サンフランシスコ市の邦人会の要請により録音テープの吹込みを行う。

11月23日 市農業まつり恒例の「おはやし会」出演

1月8日 明徳学園相洋中高校に出演。

同 10日 小田原囃子の年始会を行う。

同 14日 上多古道祖神祭りに山車にて出演(少年部)

同 25日 市中央公民館落成記念の小田原地方民族芸能大会に少年部中心に出演。

1月26日 神奈川県塗装協会の法人化十周年記念行事に出演。

同 27日 小田原ライオンズクラブの会に出演する。

会場は市民会館。

3月27日 神奈川県の民族芸能「講演と映画の会」が  
中央公民館で催され、昨年の祭典に撮影の  
文化財記録保存の映画を鑑賞。

○昭和五十七・五十八年度

館長 小林 喬 副館長 中村 勇・阿久津 馨

会計 一寸木 彰

○昭和五十九・六十年度

館長 小林 喬 副館長 阿久津 馨・清水 昇

会計 一寸木 彰

豊かな時代は、価値観の多様性を要求し、異質なもの  
とも共存を求めていることから、公民館活動も若い世代  
から実年までの参加を促して、「マイ体操」などが企画実  
施され、子どもたちには新しい時代に社会性意識を育む  
意味を兼ねて環境美化運動を積極的に進めるよう努め  
した期間でもありました。

創業以来、七十年にわたり多古の地にあつた小田原製  
紙株式会社も経済界の情勢から東京本社に吸収されて、  
その跡地には百五十世帯の新入居者があり、多古高級住  
宅街としてのイメージを作ったグリーンタウンは、陰に  
陽に多古の地域社会に変容を求めていたる観があるように  
思われます。

六十年度の主な行事は次のようです。

●子供会 美化運動を毎月第三日曜日に実施。不燃焼物  
の回収も実施し、年十五回立ち会う。

●教養部 囲碁は毎月第一・三木曜日、将棋は少年部は  
毎週土曜日の五時から、また一般成人は毎月  
第二・四土曜日十九時から。書道は毎月第一・  
三金曜日十九時から。

●厚生部 多古菊の会研究会は、菊の苗配布年2回、研  
究会は年四回実施する。

●体育部 毎週日曜日朝、ソフトボールの練習。

●婦人部 定例役員会を月二回開催。

●小田原離子 少年部の指導育成、北ノ窪、銀座自治会  
に指導員を派遣。

3月24日 足柄ソフトボール同好会の前期リーグ戦の  
開幕。

4月7日 春季小田原地区ソフトボール選手権大会に  
参加。

4月26日 婦人部定例総会。

同 29日 婦人部は親老会総会の接待役。

5月3日 小田原離子、お城祭りパレードに参加。

同 27日 子ども会は市子連子ども大会に参加。

- 6月 6日 小田原離子、市民族芸能協会総会に出席。  
同 13日 子ども会プール操作。救急法講習会参加。  
同 18日 婦人部は市議会を見学。  
同 23日 子ども会、足柄学区保護者のソフト、ポーチボール大会に出場。
- 7月 9日 足柄ソフトクラブ、市民体育祭に出場。  
同 20日 婦人部キッチンカー教室を実施。  
同 21日 小田原離子が市農協夏祭りに出演。  
同 26・27日 子ども会夏休みラジオ体操（十日間）  
同 27日 子ども会の高学年生が塔ノ峰にて、キャンプ実施。  
同 28日 小田原離子が市夏祭りに出演。  
同 28日 足柄ソフトボール同好会の後期リーグ戦が開幕。
- 8月 3・4日 子ども会低学年児童が公民館・玉宝寺でミニキャンプの実施。  
8月 13・14日 夏祭り盆踊り大会に出演。  
同 25日 子ども会足柄学区水泳大会参加。
- 9月 8日 足柄学区健民祭。
- 同 15日 婦人部は敬老の日の催しの接待役。足柄ソフトラブ秋季小田原地区選手権大会に参
- 同 19日 婦人部は寝たきり老人の慰問。  
同 27日 子ども会、白山社祭礼夜宮、子どもカラオケ大会に参加。  
同 10日 白山社祭礼で子ども会は屋台を引く。  
同 27日 婦人部役員指名委員会が発足。  
同 29日 婦人部社会見学実施。  
11月 1日 四十四区親睦ソフトボール大会（体育部）  
同 3・4日 多古公民館文化祭作品展、芸能大会を併せ開催。  
また、子ども会学区ソフト・ポートボール大会参加。
- 同 15日 婦人部七五三合同祝い。  
同 17日 子ども会箱根アスレチックハイク  
同 24日 小田原離子が市農業まつりのおはやし会に出演。
- 12月 26日 婦人部講演会「女性の健康管理」  
同 27日 公民館の清掃作業。  
同 22日 婦人部指名委員の反省会。  
1月 12日 小田原離子新春太鼓初め。

同 14日 小田原離子、内多古道祖神に出演。

同 29日 婦人部会員の新年会。

3月 4日 婦人部入湯会。

同 9日 子ども会、六年生を送る会。

○昭和六十一年度

館長 阿久津 騒 副館長 清水 昇 一寸木 彰

会計 一寸木 彰

わが国が国際社会での経済大国、技術大国となつてゐることは、国の文化事情を見直してみようとか、考えてみようといつた雰囲気は、多古の公民館にも押し寄せてきたようと思われる。新しい主役は子どもたちですが、この子どもたちの意識の問題点は、無気力、無関心、自己中心、思いやりの欠如、心のひ弱さ、死に対する感覚の欠落などが挙げられる。これらをどのように克服し、解決していくかも、公民館活動として考えられ、進められてよいと思われる。

六十一年度の行事は、次のようです。

●公民館 役員定例会は毎月第一水曜日。

●子ども会 美化運動は毎月一回、不燃焼物の回収は年十六回で立ち会い。

●教養部 囲碁毎月第一・三木曜日、将棋は少年部は毎

週土曜日の五時から。一般成人は毎月第一・四土曜日十九時より、書道は毎月第一・三金曜日十九時から。

菊の会の研究会は、菊の苗配布年二回、研究会は年四回。社交ダンス毎月二回。

●厚生部 菊の会の研究会は、菊の苗配布年二回、研究会は年四回。社交ダンス毎月二回。

●体育部 毎週日曜日の朝、ソフトボールの練習。

●婦人部 定例役員会を月二回。

●小田原離子 少年部の指導育成、北ノ窪・銀座自治会へ指導員を派遣。

●体育部 定例役員会を月二回。

足柄ソフトボール同好会の前期リーグ開幕。

3月 24日 春季小田原地区ソフトボール選手権大会に参加。

5月 3日 小田原離子お城祭り参加。

同 18日 子ども会学区ソフト、ポートボール大会に出場。

6月 6日 小田原離子、市民族芸能協会総会に出演。

6月 22日 子ども会、学区保護者のソフト、ポートボ

ール大会に出場。

同 27日 婦人部、印刷局小田原工場見学。

同 30日 小田原離子少年部、小田原市農協夏祭り出

7月 足柄ソフトクラブ、市民体育祭に出場。  
 同 2日 小田原囃子少年部、湯浅電池夏祭り出演。  
 同 19日 婦人部（有志）湯浅盆踊り大会参加。  
 同 21日 子ども会ラジオ体操（二十六日間）の開始。  
 水泳教室（六日間）の開始。  
 同 26日 子ども会の低学年が公民館・玉宝寺を会  
場としてミニ、キャンプ実施。  
 27日 小田原囃子、市夏祭りに出演。  
 同 28日 子ども会の高学年が塔の峰にてキャンプ実  
施。  
 8月2・3日 小田原囃子少年部が富士フイルム夏祭りに  
出演。  
 同 7日 小田原囃子少年部が富士フイルム夏祭りに  
出演。  
 同 14日 夏祭り盆踊り大会に出演。  
 9月15日 婦人部敬老会に接待役。  
 同 21日 婦人部寝たきり老人慰問。  
 10月9日 子ども会が白山社祭礼の夜宮と子どもカラ  
オケ大会に出演。  
 10月10日 白山社祭礼に子ども会が山車を引く。  
 同 12日 子ども会、市子連子ども会大会に参加。  
 同 23日 婦人部、伊豆半島の社会見学実施。  
 同 26日 子ども会、学区ソフト、ポートボール大会

11月1日 四十四区親睦ソフト大会参加（体育部）  
 同 3・4日 公民館文化祭・芸能大会。  
 同 15日 婦人部七五三の合同祝い。  
 12月21日 子ども会、餅つき大会。  
 1月11日 小田原囃子、新春太鼓初め。  
 2月1日 婦人部新年会。  
 同 11日 子ども会、駒ヶ岳にて雪遊び。  
 3月5日 婦人部の入湯会。  
 同 8日 子ども会、6年生を送る会。  
 ○昭和六十三年度・平成元年度  
 館長 土屋治郎 副館長 清水 昇 一寸木 彰  
 会計 星崎政興

多古公民館が始めて設立された昭和三十四年には、戸数四百世帯であつたのが、三十年経た今日は八百六十世帯と二倍以上に増加をした。公民館の数も百十九館と大幅に増加をしている。公民館活動も多くは、いままでに築かれた上での発展的活動であるが、このままでよいのではなく、失敗を恐れず、若い人の物の見方とか、感性をいかにとり入れていくかが、これから一つの課題

といえましょう。ワープロ、パソコン等の講習会、ビデオ映像でとらえた多古公民館活動など、新しいメディア

化時代へ先取りするような積極的活動を取り入れるよう

にしたいものです。

六十三年度の各部活動は、次のようです。

●婦人部

4月10日 婦人部定期総会。  
6月17日 史跡めぐり（ふるさとの散策として七十四名が参加した。）

同 30日 婦人部、手芸講習。

7月 7日 手芸講習。

8月13日 盆踊り大会参加。

9月 4日 二川健民祭に参加。

同 15日 敬老会のお手伝い。

11月5・6日 文化祭参加。

同 15日 七五三合同祝い。

同 17日 社会見学に三浦半島方面。

12月 9日 婦人部料理実習。

1月 7日 午前六時三十三分、昭和天皇崩御され、皇太子明仁親王が践祚され、皇位を繼承される。元号法により一月八日午前零時より平成元年一月八日としてスタートする。

このことについては、年度末に記したい。

3月 9日 婦人部入湯会。

●小田原離子

5月 3日 小田原北条五代祭りに、三十六名出演。

同 12日 全国公安委員会研修会に出演。

同 30日 県庁都市行政研究会の研修に出演。

6月 7日 全国主要都市職業能力開発主管課長研修会に出演。

7月 22日 城下町小田原の夏祭りに出演。

7月 24日

8月13日 公民館夏祭りに出演。

同 21日 小田原商工祭りお離子大会に出演。

9月 4日 足柄学区健民祭に参加。

11月 6日 第二十五回神奈川県民族芸能大会に四十名

出演、会場は相模原市民会館。

●子ども会  
毎月第3日曜日に美化運動、インリーダー会議。

1月 7日 学区バザー開催。

6月 5日 高学年対象の塔の峯キャンプ実施。

7月 30・31日 五百羅漢保育園にて低学年対象のミニレク

リエーション実施。

同 13日 盆踊り大会参加。

同 25日 美化運動実施（各班ごと）

9月4日 健民祭（白山中会場）に参加し優勝。

10月16日 学区球技大会参加。

11月3日 文化祭・バザー。

同 16日 学区球技大会。

12月18日 餅つき大会。

1月29日 レクリエーション実施。

3月5日 6年生を送る会。

●文化部

5月28・29日 さつき展

11月5・6日 文化祭。

●教養部

毎週土曜日、将棋少年部は十七時三十分より活動。

毎週土曜日、将棋壮年部は十九時三十分より活動。

3月31日 館報を発行する。

●厚生部

毎月第一・三日曜日に社交ダンス。菊栽培

指導。

●体育部

11月27日 四十四区区民ソフトボール大会に5チーム

が参加。

この年度の最も衝撃的事件は、先に述べたように去る昭和六十四年一月七日午前六時三十三分に昭和天皇が崩御なされたので、皇太子明仁親王が践祚せんざいされ、皇位を継承されたことである。元号法により一月八日午前零時より平成元年一月八日として、新しい元号でスタートする。平成は中国の古典よりとったもの。即ち史記の「内平かに外成る」（内平外成）と書記の「地平かに天成る」（地平天成）。この二つの文章から平と成を組み合わせて、政府はその意味を「国の内外にも天地にも平和が達成されることである」としている。

平和なくして人間の幸福はなく、政治・経済・文化・教育の機能の前進はない。多古の地区は、この前後より神社の催しを懐かしみ、歌舞音曲もまた慎しんだことであつた。今上天皇（明仁親王）が父君の昭和天皇の喪に服する期間もまもなく終わる。公民館活動は、平静の中で時の経過に委ねてきたのである。

多古公民館が昭和三十四年に新築されてから三十年を経たが、その歩みは順調といつてよく成果を挙げてきたといえよう。今後の方向として次の点を挙げる。

一つは、公民館の事業は、社会教育教育法の二十条に

も明示されており、わたしたちは、それらを実践してきただのであるが、改めてこれら七項目を吟味検討して、地区の現実に立つての活動内容をとりあげる。二つは、指導者は成否の鍵であるから、意志の統一と実行力を大切にし、運営の妙を發揮するようにする。

(平成元・十二月三十一日完稿)

## 二十、多古を歩く

### 1、下多古

多古の住居番号は、昔から湯浅電池前に始まり、三丁

河原に終っているが、その一番地（中山家）から県道小

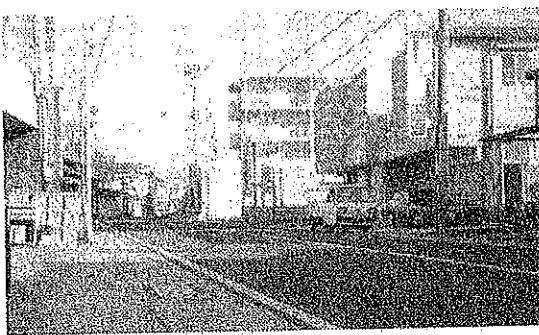
田原—山北線（甲州街道・足柄往還とも呼んだ）を北に進んで、石川薬局の倉庫のある所までは、明治五年の戸長役場のできる頃までは、多古村に属していた。それが分離したのは、飯泉の渡しの問題で紛糾したことがあってのこととの説もあるが、真偽の程は分からぬ。多古の吉老の多くは多古説をとるが、これを解説するものは、三三五等であろう。

ここでの旧家は、山崎豆腐店である。創業百年の看板が目を引くが、明治初年に富山の氷見村（現氷見市）出身の山崎喜平（天保十四生れ）が祖である。農家の次男に生れた彼は諸国修行の旅に出で当地に来たが、加賀白山の信仰から十一面觀音を尊崇していたので、飯泉觀音に詣でて觀ずる所あり、多古七番地を永住の地とした。故郷と同じ白山信仰の地であり、穴部堰や甲州街道に面した交通の便を考えて決意したのであつた。豆腐商は諸国修行の間に覚えたというが、艱難辛苦を経て信用も高まり地盤もできたが、大正十三年二月七日に没した。二代藤藏（大正十三年十二月十五日没）・三代定雄（昭和六十一年八月二十日没）が継ぎ、今は四代康正氏である。伝統の手作りの味が評判の老舗である。

#### (1) 小田原扇町ビル（リチャード・パレス）

甲州街道沿いの豪商として著名な老舗茶利商店が、平成元年七月、小田原扇町ビルとして衣替えをした。一階は総合クリニックで、二～四階は三DKマンションという豪壯で明るいカラーの高層建築である。住居者用・患者用に仕分けした広い駐車場つきである。

祖先から受け継いだ土地を有効に活用。日照権のことも考えて周到な計画で建設されたが、地域医療センター



村山建材店前よりリチャーバレスと町並を見る(図125)

の機能を持つユニークなビルである。

昭和六十三年三月二十日、茶利商店の工事現場に次の掲示板

が出た。

六十三年

小田原駅町ビル  
(リチャーバレス)  
中山清子・中山善夫  
昭和63年10月17日～  
同64年7月31日  
北野建設KK(銀座)  
昭和63年9月13日

1 F  
(駅町総合クリニック)  
2～4 F  
(3DKマンション)

物 始め、石倉  
物 (母屋を

春には旧建

(4) の除去工事が始まり、建設は順調に進んだ。完工と同時に十五のマンションの入居者が入り、一階では「仁メディカルグループ」の総合医療が始められた。その内容は

容は

- 吉田整形外科医院 (整形外科・理学療法科)
- 扇町皮膚科 (皮膚科)
- 高見沢クリニック (小児科・循環器科)
- 他に入居医師が定まる。

医薬一体の関係で、奥津薬局が県道に面して同時開業をしているが、この地点から穴部堰は県道を西に切つて星崎金物店前に出て、出戸橋の方に進んでいた。

診療患者は日を追つて増加し、医は仁術なりとして評判も高いが、このユニークな着想を実現をさせたのは、六代幸太郎氏の未亡人清子氏である。

茶利商店の祖は惣左エ門といい、栢山の米山家の出である。米山家は、徳川二代將軍秀忠の頃からの旧家であったが、惣左エ門は農業を嫌つて小田原駅の茶又(江戸期の両替商)倉を七つも持つ金融業者)の奉公人となつた。商才も抜群とあつて忽ち一番番頭に抜擢されたが、お札奉公のあと、将来性のある場所を物色。多古二十五番地の中山氏の土地(九蔵と思われる)を入手し、日常雑貨の商売を始めた。時に安政二年(一八五五)三月のことである。主家のノレンをもらつて茶屋の利八——茶利と呼んだ。茶利商店の創始者である。

彼は千頭小路の「にんべん」(魚商)の娘を妻として迎え、刻苦勉励の日々であった。二代・三代・四代と利八を襲名したが、五代は両親の病死により襲名せず光太郎と名のつた。生来利発な少年光太郎は小田原中学校(現小田原高校)に進学し、大正二年三月に卒業。家業に専念し、畠表部の新設など業種も拡張させると共に荻窪駅前・成田・多古などに不動産を取得して「小田原の茶利」と言われる程に、身代を築いたのであつた。

昭和五十二年二月二日、八十一歳で没した。多額の遺産相続税の解決の中で、遺跡の六代幸太郎氏が後を追うごとく他界した。相次ぐ不幸の中で相続の事後処理に当り、危急を克服して家運の隆昌を図られたのがその妻清子氏であり、長男善夫氏である。安政二年に始まる百三十年の茶利の歴史は重い。

## (2) 星崎仲吉商店

商家の奉公人として勉励された体験を生かして身代を築き基礎を固めた点で、星崎仲吉商店が挙げられる。初代仲吉は、矢作<sup>やはぎ</sup>の出身。少年の日に志すところあって、寺町の真島<sup>ましま</sup>荒物店に年期奉公をし、終つて多古のこの地をトして金物商を始めた。商売の場所設定には村山銀蔵（啓造氏の父、アメリカ帰りの資産家）の助言もあつたと聞く。商売は繁昌して二代幸太郎・三代の当主政興氏と順調に伸展している。

横浜銀行の跡地も買収して広い間口と奥行のある倉庫と店と敷地で、新日鉄亜鉛鉄板、月星カラーカー、七つ星プリント、住友トタン、ヨドプリント、クボタカラーベスト、三菱雨どい、一般鋼材、ステンレス、板金機械工具、住宅器械製品、マツダ電動工具など手広く扱う豪商である。

## (3) 村山建材店

村山家は、前述の寺町の荒物商真島商店とは親戚関係であった。また初代幸太郎氏の弟は、明治一大正期にかけて社会事業家として名を馳せた村山大仙師である。多古の村山家に生まれ、宝安寺（現・浜町一丁目）の住職となつた傑僧である。二代銀蔵氏は、当時、流行のアメリカ稼ぎに行って、故郷に錦を飾つた人で、余生をランプの商いをして送つたという。

当時、星崎金物店の番頭として秀れた実績を持つ啓造氏が請われて後継者となり、セメント類（中央セメント他各種）などの建材料、東芝電動工具などを手広く扱い、秀でた経営手腕で業界の雄として伸長著しい商店である。現在、父啓造氏が株式会社村山商店の会長、長男泰久氏が社長の椅子にある。

他家に奉公した体験を生かして成功したケース三件をとりあげたが、人それぞれに歴史のあるように、家や地域にも歴史はある。神尾芳之助氏のごときは、華道・茶道の奥義を究められた人物なので記して、人間の生き方の資としたい。

#### (4) 芳月流家元神尾芳翠氏

本名は芳之助。明治三十五年二月、飯泉の農家の次男に生まれる。若くして下多古に出て履物商の傍かたわら、田島松翠氏について宿願の華道に精進、五年にして宏道流師範教授の免状を得た。二十六歳の時である。次いで小田原華道協会が設立されると、その会長に就任するも、尚精進を怠ることなく、遂に五十歳の時に華道芳月流を創流して初代家元に就任し今日に至る。

日本いけばな芸術協会評議員、小田原市文化団体連絡協議会副会長、神奈川県華道連盟名誉会長を兼ねている。氏は、また人の師たらんには自己研鑽の要あるを痛感し、四十九歳にして煎茶道東阿部流に入門し精進。忽ちにして同流理事、小田原茶道連盟参与となつて今日に及ぶ。華の道、茶の道に精進すること数十年、小田原地方におけるこの世界の重鎮である。

門弟も多く、県立小田原城東商業高校華道部、印刷局小田原工場華道部などは、五十年前後も後輩を育てて倦むことがなかつた。

八十歳にして文化功労章を受章し、また勲五等瑞宝章を授受。

下多古の同家玄閥正面には「芳月流家元本部」の大き

な看板が掲げられてある。高齢の今は、長男の信翠氏が後を継いで活躍している。

下多古は、小規模商店が甲州街道に沿つて、幕末以来、逐次に増えてきたが、震災時は一文商いを含めて多くの商店が軒を並べた。目立つたのが米穀商で、下の方から和田、野頬、黒柳、小杉、菊川と五軒の米穀商が繁昌していた。上部吉田島村、酒田村あたりの西郡米にしきゅうまいを買いつけて大八車で運搬し、商品として販売したが、寿司米まじいとして宮小路あたりの需要多く、玉宝寺から下多古にかけての街道で、忽ち売買されたといつ佳き時代でもあつた。鋪装もされない砂利道を馬車も行き交い、穴部堰は右左に並流し、素朴な詩情も湧く風情であつた。

#### (5) 出戸橋

出戸橋といえば、中山家（現当主恒昭氏）をいう場合が多いが、同家の東南の位置は、穴部堰と久野用水路の合流点で大きな石橋がかかっていたことから名づけられた。陸上交通では甲州街道・大山道・久野道・そして多古丘陵尾根道などの接点といえる要衝の地であつた。商人は特にのどぼとけのような所といい、商売をするなら、この周辺を望んだのである。既に述べた茶利・星崎金物

店・星崎繩店・村山・久保田・野地・菊川（震災までは出戸橋の屋敷の一画で米穀商をしていた）・中山商店・藤沢・小杉・岩本・野頬・田渕・米谷・山崎などが、その例である。

この出戸橋の中山家は東側の中山繁三家とは本分家の関係であり大地主だったが、敗戦後の農地改革で広い土地を手離した。当主は出戸橋興業会社を経営し活躍されている。多古城の大手門のあつた所とする説もあるが、確たる資料もないのに、あつたと断定はできないが軍事上、重要な地点であつたことは否定できない。

#### (6) 中山繁三家

大山道の道標を邸内に持つ旧家。初代市郎左エ門（寛文六年九月五日没）、二代同名（延宝四年六月二十四日没）、三・四・五代は調査不十分で不明だが、六代九右エ門（寛延二年七月二十四日没）、七代同名（明和七年三月三十日没）、八代同名（享和四年一月八日没）の頃は、内多古の名主をしていた、九代九蔵（嘉永五年九月十六日没）の晩年に下多古の現在地に移り米穀商を営んだ。（内多古の名主は土屋氏——現当主桂一郎氏の祖）、十代同名（明治十九年十一月二十六日没）、十一代儀三郎（九蔵養子、大正五年七月三十日没）、十二代同名（昭和二十五年

三月十一日没）、十三代義雄（昭和十九年六月二十六日、北千島戦死）現当主繁三氏は十四代。  
九蔵は相場に明るく、不動産も相当保持していたが、菩提寺（玉宝寺）には地蔵菩薩数体を寄付するなど仏心も豊かな家風であった。

同家保管の道標の正面に「右いい津み道」、左側面に「左い沙意陀道」の文字が刻されているが、飯泉道・井細田道への道しるべである。裏面に「大和屋文蔵母」とあるように文蔵の母が飯泉観音の門前町の宿坊として栄えた頃に建てたものであるが、この道しるべの東側の大山道に沿つて、酒匂川の増水による川留めのための旅籠が一軒はあつたと推測される。

#### (7) 新興の相原興業株式会社

大山道への道しるべを左に見て東進すると、右にウイング（旧平安閣）の駐車場がある。ここは明治一大正一昭和十年代までの繭の集荷場として多古商会が運用した建物のあつた所で、田舎芝居にも使用された。その東隣の中村運送店の東側が相原興業の入口。間口は狭いが奥が広く深く、二、五〇〇坪の敷地である。かつては一面の田・桑畑だったが、相原興業が昭和二十六年に貯炭場として湯浅電池工場より買収したものである。

昭和二十四年九月、石炭・コークスの統制廢止とその自由経済に復し、株式会社となつて常盤炭鉱の特約店となるため、秦野市内に持つていた祖先伝來の山を売却して、一金壱阡万円を用意し特約店になり、石炭・コークス等の燃料の販売を再開することができた。また、昭和二十六年の頃、酒匂印刷局と随意契約のできたことも、相原興業が隆昌になる切っ掛けであつたといわれる。

現在、会社が扱つている商品は、重油を中心とする灯油、白灯油の三つで、大きなタンク三基が、それを象徴している。営業種目も次のように多様であるが、合理的、積極的経営によつて成績は急伸している。

#### ○営業種目

- (イ) 工業用・船舶用・ホテル業務用の灯油・重油販売
- (ロ) 工業用機械・建設用重機の特殊高級潤滑油販売
- (ハ) 適正な潤滑油の選定及び潤滑油の使用法検討・使用潤滑油の性状分析・循環系統のフランシング更油作業
- (二) 石油化学製品販売
- (ホ) 工業用コーキス販売
- (メ) オートリース販売
- (ト) ガソリン・軽油・オイル・家庭用灯油販売

(チ) 六ヶ月法定点検・車検・更油・洗車

(リ) タイヤ販売修理・バッテリー販売と充電

(ヌ) 自動車用部品・アクセサリーの販売

(ル) プロパンガス充填

(ヲ) 業務用・家庭用プロパン販売

(ワ) 冷暖房設備・設計・工事施工

(カ) 損害保険・生命保険代理業務

(ミ) 電話機・インター・ホン・ファクシミリ販売など

小田原の林角にあつた本社を多古の現在地に移したのは、昭和六十二年春のこと。年商六十億を越える成長著しい企業であるが、この基礎を作つたのは二代社長相原金太郎氏（明三十六・四・十五生まれ、昭六十三・八・十没）である。初代安太郎氏は秦野市菩提の生まれで秦野で雑貨商・呉服商を営んだが、その長男に生まれた金太郎氏の利発を見込んで、小田原に下宿をさせて小田原中学校（現小田高）に学ばせた。が病魔に倒れて中退。

人生の岐路に悩んだが、商人の血を引くわが身の商才を生かすことを發心し商売に打ち込む。関東大震災後、林角に出て薪炭商を始め、次第に石炭・コークス・豆炭・煉炭を扱う。昭和十七年四月の石炭の全面統制で一部を休業したが、同二十四年九月、石炭・コークスの統制廢止

止とともに自由経済に復したので、株式会社相原商店となり常盤炭鉱特約店として、石炭・コークスの販売を開し、翌二十五年六月には出光興産販売店として石油類の販売を始めた。商売は順調に伸長して、同三十五年十一月には商号を相原興業株式会社に変更したが、従業員十五名で新潟から季節労務者を傭つての運用であつた。

その後、同四十九年十一月には東京火災・大正海上火災の両保険会社の損害保険代理業務を、翌五十年六月には出光石油化学株式会社販売店としてその製品販売をするに至つた。

今や、営業種目も、営業部・給油所部・食品事業部・プロパン部・保険部・通信設備事業部・輸送部の七部門で伸長著しく、従業員六十名を数えるに至つた。

三代社長振作氏（昭和二十一・二・六生）は、都市におけるエネルギー消費量は、その地域の活力を示すものと考え、親しまれ、信頼される企業を目指して、地域と共にエネルギーを考え、地域と共に豊かな明日を拓いて行きたいとしている。父金太郎二代社長の妹フミ氏が会長職にある。

#### （9）小田原の娛樂地帯

小田原市内に大山道を挟んで娛樂街がある。シル

バー・ボール・サンデーサン・喜左エ門食堂・釣り道具店・コナカ洋品店である。これらは戦争中に日加工業分工場として防毒関係の道具を作つていた工場の跡地にできた施設である。即ち西武ボリマは、昭和二十三年に、この同四十五年に廃業。翌四十六年には西武の資本で流行のボーリング場に変身したが、国道二五五号線が同じ年度に至近距離の地を通過するようになつたこともプラスにはならず、二年後には不況が原因で、パチンコ店經營に切り換えて今日に至つてゐる。人気は衰えることなく盛況で、広い駐車場は常に満杯の状態である。

この地域一帯は、かつては新井一郎氏（久野）の所有であったが、今は川口又次郎氏（肉商）が地権者となつてゐる。平塚の女将相馬久恵氏がこの地に着目して、白亜の四階建ての平安閣をオープンさせたのは、昭和五十八年九月のことである。今はレストラン・ウイニングとして多目的な經營をし、娛樂地帯の一環をなしてゐる。

#### （9）小田原消防署北分署

加藤兵太郎商店の前、穴部堰右岸の同家所有地にある。昭和四十六年七月十七日の改築。

戦時中に活動した小田原市警防団は、戦後に小田原市

消防団と改組し、二川地区は十二分団として、第一班(井細田)は腕用ポンプ、第二班(多古)は手引きガソリンポンプを持ち、団員四十名で活動したが、昭和二十三年に小田原消防署北分署建設の話しが進み、この土地を候補として交渉が進められ、永野消防本部長・府川松五郎市議・山田甚蔵多古区長が、地権者加藤栄造氏と談合して借地が成立。昭和二十六年七月十六日に、先ず木造二階建て庁舎を新築し、小田原消防署足柄出張所として開署した。その後二十年を経て、現在の鉄筋二階建ての庁舎の改築となつたものである。

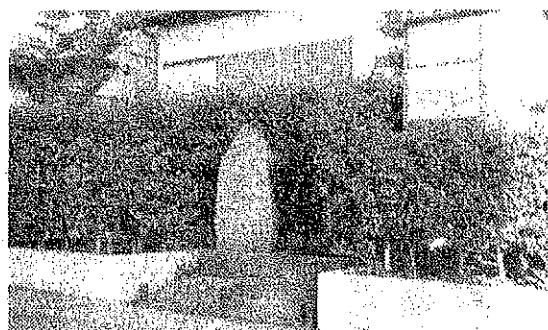
この北分署の南に、多古の公会堂があつた。昭和二十三年春、山田甚蔵区長は平地に公民館を建設することを企画し、この地に木造平屋建てを新築し公会堂と呼んだ。白山神社が丘陵の高所より現在の低地に下りて、公民館が落成する昭和三十四年九月二十五日まで十一年余の公会堂であつたが、解体して今はない。

身代わり地蔵尊は、この北分署の西側に立つてゐるが香華は絶えたことがない。

## 2、中多古

(1) 小田原グリーンタウン  
かつての小田原製紙工場の跡地に造成された住宅街である。

小田原製紙工場は、大正八年(一九一九)の創業以来、六十年間、製紙生産工場としてわが国製紙業界で重きをなしていた。敷地は一万五千坪あつたが、農地開放で大半を放出していた。



小田原製紙工場は、大正八年(一九一九)の創業以来、六十年間、製紙生産工場としてわが国製紙業界で重きをなしていた。敷地は一万五千坪あつたが、農地開放で大半を放出していた。

昭和五十年に東京本社に吸収された跡地を積水ハウスが買収し、これに建売住宅・注文住宅を建てるグリーンタウンとして四千万円～五千万円で販売した。区画も整然とした高級住宅街であり、文化度も高い地域である。英語・数学・音楽・美術・珠算などの塾を開いている家が目立つ。

昭和五十九年四月一日から小田原グリーンタウンとして独立した。自治会活動は集会所を中心に、行われているが、白山神社などのお祭り行事などは、四十四区自治会と共同で行つてゐる。

現自治会長は、小林 実氏。国鉄・北海道の出身で人物である。区の南側の通りの中央に水神碑がある。

その表面には、「昭和五十六年九月吉日、積水ハウス株式会社建立」の文字が刻まれてある。かつて堤防が決壊して、その水路となつた地帯なので、再びかかる不幸のないようにの願いをこめて建立したものである。

#### (2)玉宝寺門前宝塔

山門に至る道路の入口に建つ二本の経文宝塔は、台石に刻まれた文字から一本は宝歴元年（一七五二）十二月に多数の檀徒が寄進したもの、他の一本は中山広蔵が施主として、父母のために明和五年（一七六八）六月吉日に寄進したものであると読みとれる。

二本とも時の玉宝寺住職隣堂のときに立てられている。檀徒衆の分は二十一名で、姓は明記されているが、名は頭文字だけを刻してある。例えば「渡辺六」、「中山林」、「上原金」のようになっているので正確な名が判らない。施主は名も広蔵と明記されているが、どの中山の祖か調査中である。

#### (3)玉宝寺境内の「六鵬玄和の和讃碑」

山門を入れると右手に、この碑がある。

玉宝寺は天桂山と号して曹洞宗。羅漢があるので著名

で多古の五百羅漢で通つてゐる。武相三十三所觀世音靈場の第二十四番の札所として知られる。そのご詠歌に、

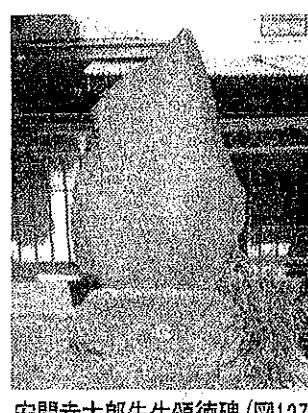
次のものがある。

「わがおやに、にたるほとけも、あるらかん  
まわりておがまん　たこのてらかな」

静岡県藤枝の出身で、青少年の頃から数奇な運命をたどりつつ書道の大家となつた人。昭和の初め、僧堂生活をし托鉢して全国を歩いた時に、玉宝寺に立ち寄つて書いたのがこの碑の筆跡である。

#### (4)玉宝寺境内の「安間幸太郎頌徳碑」

鐘撞堂の南に建つ。



安間幸太郎先生頌徳碑(図127)

医師として、学校医として、男女青年団、婦人会の師として、名利を度外視して仁術を施した安間先生、足柄小学校長森丑太郎先生の撰文になるが、風雨で碑文も摩滅している。「隠れたる偉人安間先生、諱は幸太郎緑雲と号す 静岡県盤田郡西貝村に生まれ、笈を負うて東都に出でて薬学を学び、更に医学を修め業を卒へて明治三十六年八月、居を相陽井

細田にトして医業を開き、名利を度外視して専ら仁術を施し、聲望年と共に挙り県郡医師会の重鎮たり。夫人シナ女史、産婆を業とし其の恵沢に浴せしめたるもの枚挙に遑あらず又各種婦人会長として活躍せられ衆望一身に集まる。先生人に接するや談論風発侃諤徹せずんば已まざるの慨あるも敢て固執するなく恬淡無凝自ら畏敬親昵の感を抱かしむ。常に愛國の至情に燃え眼を宇内の大勢に注ぎ交を各界の有志に結びて所信を断行す。名実共に國手なりと称すべし又特に禪門の大德新井石禪々師に帰依して深く仏道の真諦に參し拔苦與樂を信条とし無告を救済し、一旦有事に際会するや夫妻相携へ物心両面を傾注して援護慰藉、其の赤誠衆俱に之を贍る。太平洋戦終局後、國民道義の頽廢秩序の紊乱せるを憂ひ、教育の刷新信仰の徹底を以て救國の要諦とし、特に婦人の奮起を要望して在來の指導に一段の努力を払ひ、又自己信念の表現として玉宝寺域内に護国觀音を建立し以て國民善導の指標とし其の除幕式を挙ぐるの前日忽焉として逝去せらる。享年七十二時維れ昭和二十三年十月九日、人皆言ふ大慈大悲觀世音菩薩の化身なる哉と頌に曰く先生状貌魁健、烟眼人を射るも破顔一笑衆之に共ふ。交て貴践を徹するも特に弱苦を憐恤し、毅然として吾が真を行じ、

陰徳を施して陽報を望まず愛國慈善是れ先生の生命、名利を超越して信念に生き至誠一貫七十二年嗚呼先生は郷党の恩人、皇國の支柱、風格溫容何處にか尋ねん。首を回らせば天桂山城白雲深し。噫。

正六位勲六等 森丑太郎撰押書

### (5) 多古の処刑場跡

玉宝寺山門から東に延びる参道が甲州街道（小田原—

山北線）と交差した先

の東に進む道から三十

m右側にある。

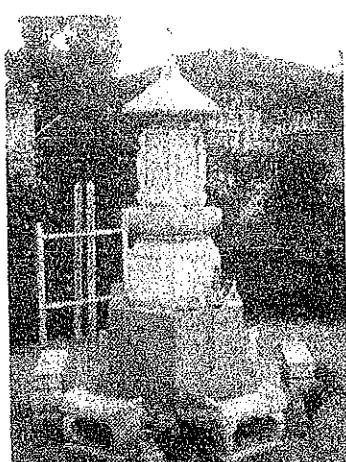


図128 多古の処刑場跡  
地蔵尊は六地蔵のレ  
リーフとなつていて、  
台座に、町内安全・延  
命息災・諸縁吉祥・心  
願成就・交通安全そし

て残る一面に次の文章が刻されている。

往昔当地小田原藩領受刑人古跡地、  
今此有功德主植松信夫、房枝夫妻、  
発願六道願主地蔵尊建立

供養右関係物故者諸精靈並  
有無両縁三界萬靈等

專祈念菩薩圓滿安樂淨土也

昭和六十年九月吉日

大雄山玉宝寺廿九世天佑実英謹書

この処刑場（山下一八三番地・山王森）の規模は、東西二十m・南北十四mで、後北条時代から明治維新まで使用された。時は移り今は一部畠地で他は住宅となつてゐるが、地権者は玉宝寺であつたのが、農地開放で民有地となつたものである。

昭和初年に足柄小学校の学校試作田が、この近くにあつた頃は丸塚をなしていた。しゃりこうべを積んだ塚である。しかし、明治末年から大正末期までは家畜市場が開かれ、馬などのせり市も開かれたが、この時には丸塚は崩れてなくなつていたといふ。

天正十二年（一五八四）伊北弥五右エ門が安藤升の大小を作るの科によつて、その十月に処刑されたことは北条五代記にも見られるが、瀬戸堰の開削に当り正徳五年（一七一五）山北村岸の幾左エ門が連年の水害地を測量して精密な耕作地図を作成した科でこの刑場で処刑され

ている。寛政七年（一七九五）に閑所破りの農民が多古村で処刑されていることは、御引渡し記録に見える。大磯の籠屋が強盗の手助けをしたために山王森で処刑されたのが、この刑場最後の処刑者であると、土屋政春氏は祖父から聞かされたと話している。受刑者は、小田原宿の牢屋町（今の浜町の誓願寺・安国寺の西に牢屋があつた）から、駕籠とか馬の背に乗つて玉宝寺に送られ、住職に引導を渡されてから、山王森のこの処刑場で処刑された。

名利を度外視して働いた安間幸太郎氏は、刑場跡地のシャリコウベを二〜三個、自宅に保管したという。

### 3、上多古

玉宝寺入口の丸島菓子舗より県道を北に小田急ガードまでの間は、関東大震災までは家並みはなく、両側は田と桑畠が広がつていた。大正十四年に大雄山線が開通し、五百羅漢駅（今より南の伊東商会南側の白山中正門に通ずる道の傍にあつた）ができてから、家並みは漸増したが、戦後の高度経済成長時代から、塗装・自動車工業・食品・飲食・印刷・外科医院・薬品工場・マンションなどの業種が軒を連ねるようになり、とくに今夏、伊豆箱

根鉄道が、五百羅漢駅に、コンビニエンスストアを一階に、二～四階はマンションという新スタイルを建設し、活気ある町なみとなつた。

(1) 添田家

名刹玉宝寺に供養の羅漢像を寄贈した智鉄・真澄の血統を引く家。遠い祖は北九州の添田村（現、添田町）で、西大友出身の戦国大名大友宗麟との奇しき縁で多古に土着した後えいに当る。油屋として名の知れた添田富右エ門（磯崎武雄氏邸の東に住んでいた）は、当主春原氏の祖父妻吉の兄である。妻吉は天保十二年生まれで村の指導者であり、富士講の先達をした程の人物であり、父勇吉は篤農家で区長をされた人物である。当主春原氏（明治四十・二・四生）も精農家で生産組合長も勤められたが、少年の日、足柄小学校を卒業して、旧制中等学校には殆んど進学しない世相の中で吉田島農林学校（今の吉田島農林高校）に進学。小田急のなかつた時なので、父のはからいでハイカラとされた自転車で通学し卒業したエピソードを持つ。

(2) 中山峯吉氏と同市蔵氏

上多古は地方政治家を生んだ風土を持つ。峰吉は天保十三年七月一日に多古三〇九に生まれた。明治十六年に

多古村戸長、同二十二年四月に二川村誕生の時に助役となり次いで村長。同四十年下郡会議員、同四十二年には、誕生した足柄村の助役となり、名村長の小沢顯次を助けた。当時井細田村の名村長の評高かりし石川徳次郎氏（大坂屋呉服店主）と並び称された。

長男市蔵（明治九・二・十四生）は、足柄村会議員、造林委員、下郡農会議員、足柄村助役を勤めた。精農家であり、米麦種子の改良、馬耕普及、病虫害の防除など農事改良家として下郡農会・大日本農会の表彰も受けた人物。三丁河原にも広い土地を持つ大地主であったが、農地解放で所有の土地の大半を手放し、平成の今は、その持ちし家屋敷・所有地のすべては人の手に渡り子孫もこの地にいない。

(3) 上多古遊園地とギックリ曲り

上多古遊園地の南面する稻荷社・浮彫双立像合掌型道祖神・石祠型道祖神・五輪の塔は、昔は園地の西側に東面して安置されていた。道標（道了尊・飯泉の渡しや小田原への道しるべ）や南無阿弥陀仏（安政五年九月建立）の碑は、昔ながらにある。この園地は上多古の信仰の基地であり、飯泉の渡しへの巡礼街道や道了尊への基点であり、甲州街道の接点でもあった。

念佛小屋は、昭和四十五年度に小田原市・多古自治会・下田顕三・磯崎ナカ・山田万造・鈴木良平・浜野栄太郎・中山峯太郎・立木弥太郎・一寸木博光・村山啓造・下田製材所・村瀬塗料店・永井一雄・城所酒店・中島稻之助・山田甚蔵・加藤邦雄・上多古稻荷講の各位と一の組より同十組までの各位の淨財によつて建築されたものである。

図46で示したように、昔の甲州街道は岩田邦雄宅の西を直角に北に折れて遊園地に向かい、その手前の中山美治宅の角を直角に西に折れて、城所商店南から穴部に抜けたが、この直角に折れて進む二か所は、江戸時代から大正時代にかけて馬力・馬車の通る主要街道だつたので、竹荷を積んだ馬力が、曲がり損ねて田んぼに落ちたり、両方の御者がよく喧嘩口論をした所であつた。今はこの曲り角は緩やかになつたが、県道は岩田マサ宅前で西進し、城所酒店西から穴部に向かつてゐる。

#### (4) 一里塚

城所酒店と山室商店の間は、一里塚のあつた所。徳川幕府の交通政策で、東海道と同様に小田原—甲府間も一里ごとに榎を植えた。目印となり距離も分かる便利さが

ある。榎を見たくば、近くの磯崎荘覚氏の裏庭に樹齢三五〇年を経た榎があり、一号古墳にも三百年は経たのがある。

近くの津田家の祖母は、今から六十余年前の大正時代には、ここに大きな榎が、天を魔すように立つていたと話してくれた。

#### (5) 妙泉寺跡周辺

一里塚跡を右に見て県道を横切つて西に進むと、穴部堰の水門に出合う。控え堤防はこの地点まで延びていたのである。妙泉寺堰は、この水門から東に流出し、控え堤防沿いに東流して、穴部堰と共に多古・井細田・今井・町田・中島・山王・網一色の灌漑用水として重要な機能を果たして來たのである。

この水門の後手は丘陵東部の窪地になつていて、東から北の穴部台地にかけては開けた地形であり、祖先が農耕をし、居住をした地域であつた。それは人骨の発掘や窪地の一角に妙泉寺（日蓮宗）があつた史実からも推測できよう。妙泉寺は北条氏康の軍略で小田原の御幸が浜に強制移転させられたが、平成の今も健在である。磯崎武雄・同荘覚画氏の祖たる磯崎主水宗晴（後北条に仕え、後に縁あつて大久保氏に仕えたが、慶長年間（一五九一

(一六一四) 多古村に芝切して農民となつた) は、一族と共にこの地を開発して平地に進出していつたものである。

「上多古の開発」のところで書いたが、古老が上多古に初めて移つたとする添田富右エ門・竹屋の本家の陣太・岩田力三郎・磯崎藤藏・磯崎政五郎・中山福松の祖あるいは、現在この地の地権者たる中山博・岩田マサ・中山義治・添田吉郎の諸氏の中には、その祖がこの窪地で、二宮尊徳の報徳仕法を実践した報徳畑にかかわつた人もいた。

穴部堰は丘陵の裾沿いに整備されて南流しているが、関東大震災までは、トンネル数か所を掘削して用水を通し、甲州街道に、内多古にそして池上の部落に流していいた。地震でトンネルはすべて崩壊し、流路も変わつた。内多古の上原権右エ門らが粒々辛苦の上、掘削した内多古用水は、壊滅的崩壊で再び活用できず、池上用水は、トンネル内部を掘り下げる、昔ながらに灌漑用水路として生かされている。

崩壊した多くのトンネルの中で、利用できるものもあつて、甘藷、野菜等の貯蔵庫として活用している篤農家もいる。生活の知恵が生んだ自然利用である。

穴部堰は水路に沿つて側道がコンクリート化され、四輪車も通る道路として工事が進められてきたが、この一年来、玉宝寺に寄つた方が、遅々として進んでいない。

この側道の東側に上多古開発の恩人ともいえる子孫が居住する。磯崎武雄、井山直蔵、磯崎莊覚の各氏である。祖父の代までは、両川の洪水のたびに丘陵に避難したものであつたと語つてくれる。この自然の脅威から、祖先伝來の田畠・家屋敷を守るため、家屋の北側に5mと二十m前後の幅に真竹の林を構築し、南側には松(防風林として)の林を構築したものだと熱っぽく語つてくれたのは磯崎ナカ氏である。

穴部堰の水を引用して水車で米をつく水車業を始めたのは磯崎藤藏(武雄氏の祖父)で、明治十三年四月のこと、戸長久保田彦兵衛の時であつた。この水車がきつかけで、穴部堰下流地域や妙泉寺堰の下流域にも作られていつた。

#### 4、丘陵を西に進む

穴部堰側道を南進すると、池上用水の取入口がある。この傍らに妙泉寺橋がある。上多古の小田急ガードの所から諫訪ノ原へ向かう道が西進し、大雄山線を過ぎて間

もなく、穴部堰と立体交差をして建造された架橋である。昭和五十六年三月に、ピー・エス・コンクリート株式会社が、PC単純ホロー床版桁形式で、プレテンション工法で施行したものである。

(1) 馬頭観世音 高さ四十五cm、幅二十cm

妙泉寺橋より緩勾配の坂道を少し上ると、中山一桜氏邸がある。昭和五十六年春、上多古の添田春原氏の北隣りから、ここに転居した。柑橘・枇杷・一部雑木林に囲まれた眺望絶佳の場所である。

(図129) 父友三郎の代より牛の飼育による農業經營を進める精農家として知られ、生産組合の役員も長く勤めた。たまたま、牛の病気による急死により、蜜柑畠の一隅に埋めたが、祟りのないよう馬頭観世音(中山一桜氏宅)に、かねて信仰していた新芝の観音(御殿場)にも詣で、馬頭観世音菩薩の塔を裏庭に建立したものである。今、稻荷神社に隣り合わせて、静かな信仰の雰囲気を醸し出している。

(山神社の北側・上山神七四〇)で、一桜氏は二番手であるが、今急ピッチで住宅、マンション、天理教の教会施設などが建設され、斜陽産業となつた蜜柑園は宅地化されつつある。丘陵の昔の自然が失われていくのは惜しまれることだし、残すことを積極的に考えていい時であると思われる。

## (2) 新築ラッシュ

### イ、カルチャーセンターの出現

上山神七三〇の一。レストラン、ウイングに次ぐ平塚資本の進出である。平塚市の女将相馬かね氏が、都市開発法による開発許可を得て建設したもの。丘陵北側の急な地形を利用して四階建ての建築で、昭和六十三年十一月オーブンした。華道・書道・手芸など芸術の世界の教室や研修施設、法要などに利用される。

厚木一小田原バイパスを眼下に、そして丹沢・曾我山を遠望できる好位置にある。

### ロ、ライオンズ・マンションの建設

カルチャーセンターの南西、久野坂下分であるが株式会社大京による建設。二十七戸の共同住宅で面積七、七一六m<sup>2</sup>。地上地下七階の高層建築。箱根・伊豆の眺望をほいままにできるが、箱根嵐が強いのが欠点の一つ

だろう。

#### ハ、天理教小田原分教会の建設

久野宇山神下六〇六番地の蜜柑畠地帯八六七二<sup>m<sup>2</sup></sup>に建築が進められている。神殿（本殿）は平成三年には完工するという。着工は平成元年一月二十日であった。事業主は、栄町四一一〇一二〇、武雄 仁氏。

#### (3)足柄郷発祥の地の碑

久野坂下分の山ノ神神社の境内に建つ。表は小田原の漢学者であり書家であつた宇野氏の後えいの宇野応之氏（浜町）の書による「足柄郷発祥の地」の文字が刻されており、裏には次の万葉短歌と説明文がある。

東地ひがぢの たこのよぶ坂 こへかねて

山にか寝むも 宿りはなしに

「当坂下の地は、古代足柄の郷発祥の地

足柄郷発祥の地碑(山神社)(図130)

であり、また屯倉・田部が置かれた地である。これを将来に伝え古代史究明の資として残すものである」

昭和五十八年（一九八三）八月

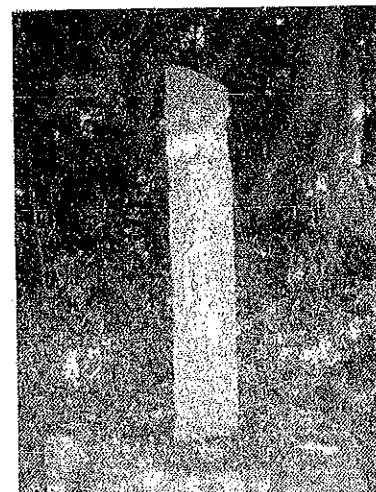
立木 望隆 浜野 愛之助

多古の地名の起りについては、立木望隆氏は、大化改新後の公地公民制の前駆として、全国に屯倉が置かれ、田部たべが配されたが、これに従属して働いたのが田子であつた。この田子たちの集落をそのまま呼んだのが多古の地名の起りであるとしている。外に、二、三の説もあるが、それぞれ根拠を持つことであり、否定はしない。話しへ戻るが、この万葉短歌の呼坂は、東路に有名な難路だつた。この歌は本歌で、替歌に「東路のたこの呼坂越えていなば、吾は恋いんな、後は逢ひぬとも」というのがある。共に、唯、田子の呼坂といえど、えらい坂だと聞いて、そう思つてゐる世間知らずの女性の感情で詠んだ歌。田子の呼坂なんて、そんな坂を越えて行くのだつたら、私は恋しく思うわ。それは又、帰つてくるにしても、論理を超えた心のふるえをそのまま歌つている所がよい。これと同じ感情から本歌は旅立つた背を案じていて。きっと日の中に越え切らないで人家もない山の中で寝てゐるかも知れない。一途にそう心配している。歌はこの感情を遺憾なく表白してゐる。「越へかねて山にか寝むも」の率直さと純真さがよい。呼坂とは多古のど

こだつたのだろうか。

#### (4) 塚原堰久野出口の碑

山ノ神神社より西して百米余りで一号古墳がある。既に述べた所だが、発掘して隠れた史実が公表される時は熱していると思う。この一号古墳の南の急坂を下ると、「塚原堰久野出口の碑」の金石文に出合う。坂下窪の稲荷の地である。堰は一号古墳の真下を南流して碑の東南



久野坂下窪の塚原堰出口の碑(図131)

で地表に顔を出すが、

すぐ地下トンネルを

経て長谷川広吉宅

(久野七四〇) の庭

先きで、北久保から  
の小川に合流し、久  
野用水となつて、内  
多古を経て穴部堰に合流する。然し、堰の開削された慶

応四年(一九六八)より明治十五年(一八八二)頃まで

は、前記長谷川宅庭先きのトンネル出口から、箱樋によ

つて小流を越え、対岸からサイフォンの理を利して水を高所に揚げたり、トンネルで下宿の京福寺の西に出て、

星山の地で久野川に合流していた。堰の機能を果したのは、僅か十五年程であるが、高度な技術によつて山付き

の農村の灌漑用水の問題を解決させた功績は大きい。唯、水源が細く、塚原など村々の谷津田<sup>やとだ</sup>の水利用が多いために活用できなくなつたのは遺憾であつた。しかし、久野出口の碑に近い長谷川広吉宅庭先のトンネル(震災で崩れず、立つて歩ける)から流出する水は、北久保から流下する水と合流し内多古など下流域の灌漑用水として役立つてゐる。

#### 5、坂下窪—屋敷ノ内・白山—土富—矢野麦田—い

ちつこ橋—伊勢万

坂下窪の長谷川広吉宅より久野用水路に沿つて屋敷ノ内へ向かう。東電多古変電所を過ぎると池上用水(道路の部分は暗渠)に出合う。用水の一部は久野用水路に合流するが、大部は多古境と屋敷ノ内の境界を小田急線に平行して南下し、池上部落の灌漑用水となる。大部分は暗渠で、久野川は川底を通る。

##### (1) 屋敷ノ内・白山

池上用水路辺から切り通しの間が屋敷ノ内で、続く東側が字白山の地である。丘陵の南緩斜面で、縄文・弥生時代から、祖先が生活をした地帯であつたことは著名な郷土史家石野瑛氏が、「白山の地は弥生式土器の宝庫であ

る」と指摘されたことで納得できる。その後、居住者は

低地に移住し、最後の居住者は、多古学校が丘陵東端の山下の地から白山の地に移転（明二九）に当たり移転している。田瀬徳三氏の祖はその例。

屋敷ノ内は、鎌倉幕府を支えた御家人の山内首藤氏（重俊・宗俊ら）が居住した屋敷のあつた所ではないか。また、白山の南斜面は頼朝の乳母摩々局<sup>ままあのつばね</sup>が住み尼として晚年を送った尼寺のあつた所であり、東慶院（多古学校がこの地に移転の時、多くの墓石を除去した記録がある）のあつた場所だったと思われる。これらは、若干の資料からの大膽な憶測である。

屋敷ノ内に居住した人は、確かな史料から農民権右エ門（上原理平氏の曾祖父）が挙げられる。前述したように内多古堰を完成させた大事業家である。彼は天明四年（一七八四）に生まれ、安政元年（一八五四）にその生涯を終えている。

白山の地では、土屋家（現当主は桂一郎氏）。過去帳には、元龜二年没（一五七〇）の祖が記帳されている）、中山家（現当主、繁三氏、土屋家とは、同一家系であつたと言われるが、過去帳には、寛文六年（一六六六）没の祖が記帳されている）や田瀬家（徳三氏の祖）が旧家と

して挙げられる。

## (2) 高層ビルの出現

上原理平氏宅前から南進する道は、その祖権右エ門が開削した内多古堰に平行する道である。この西側小田急線足柄駅との間に、四階建てのマンションが年々瀬にオーブンする。地の利をみての理平氏の投資である。この道の沿線は、震災時には住宅は皆無。屋敷ノ内も明治期には、上原与三郎、米山富次郎、岩田初五郎、中山啓蔵、上原広吉、磯崎伊太郎の六戸。これが増加は小田急線が開通し、足柄駅が誕生した昭和二年前後からであるが、急速な増加は敗戦後の高度経済成長に伴うものである。三階建てのマンションの外、スナック、料理店、薬局、美容、肉商、菓子商、魚商、飲食店など都市的な家並みとなりつつある。

この上原マンションの基礎工事中に、珍しい掘り出し物があつた。地下四～五mの地点より直径1mはある松材の埋もれ木が発掘されたことである。樹齢百五十年はある。往時、久野川は荒れ川で、上流勝沢川より洪水の時に流下し、この地に埋没したもので、外にも埋もれ木は埋没していると判断される。周辺一帯の地形を観察すると、兎河原<sup>とよかわら</sup>（星山）から足柄駅の方向に蛇行した帶

状の低地に氣づくが、久野川はこの地を流下していたのである。土富の字名のように、旧久野川の流域の低地で芦や真菰などの生い茂った地帯であった。これが現在のようになつたのは、地盤の隆起、地下水の変動と祖先たちが土盛りなどしながら農地として活用したことによる。土富に続く矢野麦田は東西方向の小高い丘状の地形をなしていたが、井細田村との境界をなしていた。

### (3) いちっこ橋

この境界を東すると、国鉄扇町アパートを左にみて大雄山線に遇合う。過ぎて四十m程の地点にある橋がこの橋。今はコンクリート橋で、危険防止の柵も出来て安全であるが、橋から水面までは二mは優にある。関東大震災までは板一枚の橋で人通りも少なかつた。

江戸期には、死人に代つて話しをしてくれる人は、いちつこと呼んで、素朴な農家の人々から尊敬されていた。神の言葉を伝えうる靈感師であるが、ある日、仕事を終えての帰りに、この橋を渡る時、誤つて落ちて死んだことから、この橋をいちっこ橋と呼んだという。内多古、川端などの学齢児童は、二川小学校に通うのに、この橋を渡つたわけだが、上原理平氏(明三三生)、磯崎峯雄氏(明四一生)ら、大正元年までに生まれた児童らは、こ

の橋を渡つての通学であった。

当時の橋の沿線には女竹が一一三mの高さで群生し向う側が見えぬ程で、川水は深くないが、地表よりは深く、亀もいたが、大蛇が棲息するといわれ恐ろしく、不気味な所との幼い日の焼きついた思い出がよみがえると語つてくれた。この川は、兎河原から蛇行して足柄駅の北側から白山中学運動場の西と南を経て東進し中山政平氏宅の南で直角に折れて南流し、このいちっこ橋の下を流れ、新しい久野川に合流している。

### (4) 一川小学校跡地

いちっこ橋を渡つて東進し、二五五号線を渡ると一川小学校の跡地がある。相原興業ガソリンスタンドの東側で、今は住宅化していて、注意せぬと分からぬ。

明治三十五年四月、開校の時は、敷地も周辺も桑畠が一面に続く農地であった。井細田村北ノ里が地番で今は扇町二一一三となつてゐる。多古、井細田、今井の三か村の学齢児童一〇四年生が通学した。在学児童は二五〇一九〇人程。石塚政治校長が修身科(今の道德科より遙かに人倫の道を強く教えた)の教授を、長島為義(穴部出身)、観行祐勝(中島の熊野神社神主)、石塚金助(井細田出身)、高橋(旧姓柴崎)モトら教職員と熱心な教育

を実践した。

校庭の回りには楠が植えられ、木登りに遊びに使われたが、その名残りの楠が二、三年前まではあつたが今はない。

境界の道は、村山建材店と伊勢万商店との間で終る。甲州街道に出合つたのである。ここを右して湯浅電池工場の南側を今井に通ずる道を東進する。右に富士ファイル小田原工場が眼に入る。関東大震災の当時は小田原紡績工場であった。この対称点にある太田材木店（昭二五開業）と極東精機KK（昭三六開業、船舶の部品製造工場で従業員五十名）の東側を酒匂川の堤防に出る。

## 6、酒匂川の堤防を北に進む

治山治水は名君たる者の大きな課題。小田原藩とともに同じで、大久保氏歴代藩主、その空白時代の稻葉正勝、正則にとつても同じで、特に治水には心を碎いた。堤防なき酒匂川、狩川は自由奔放に酒匂平野を奔流していた。明確には不明だが、万治三年（一六六〇）には堅固な堤防は造られていた。だが、洪水一決壊一築堤のくり返しの歴史であった。今日見る堤防は関東大震災後の築堤から堅固な築堤工事が逐次になされていった。昭和四十八

年には、政令都市の横浜、川崎の生活用水のための取水堰が築かれたが、その堰も眼下に見える。堤防上を少し進むと、鮎供養碑に出合う。

### (1) 鮎供養の碑

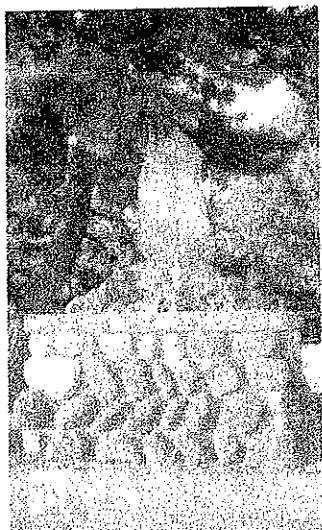
六月一日は、毎年、鮎の解禁日、この日、酒匂川では、八千貫の鮎を始め多くの魚族が全滅し、浮き流されるという大惨事が起きた。原因は狩川上流より流出の猛毒水にあつた。驚がくと悲嘆と怒りの極み。遂に供養のために、この地をトして碑を建てた。称して鮎供養の碑。県会議員耳浦善二の書である。曰く、

昭和三十三年六月一日、釣人待望の解禁は朝突如、狩川上流より流出せる猛毒水により川口に至る8kmの間の魚類は全滅し、浮き上の折柄、入漁中の釣人數千名は、余りの激変に竿を投げ出し、呆然声をのむ。けだし前代未聞の大惨事なり。

当日斃死せる八千貫の鮎を始め、日頃、釣り揚げられる一般魚族のため、この地をトし、小碑を建て供養す。

県会議員 耳浦善二書

香華の絶えることなく、六月一日の解禁と共に県外都県から電車・自家用車で駆けつけ、上流は大口辺から下流は国道一号線酒匂橋までの間に釣糸が垂れる。



餓鬼養の碑(飯泉橋右岸) (図132)

(2) 飯泉橋右岸  
国道二五五号  
線、大山道、市  
道〇〇〇九（遊  
歩道付き）の出  
合う要衝の地。

飯泉の渡しのあった頃は、ここに番小屋もあって渡し賃も取っていた。徒歩で渡る時代もあったが、川筋が中洲をはさんで多古側と飯泉側に分流していたので、二つの橋を架けた時代もある。飯泉観音や大山詣で以外の商用もあるが、間道として利用された。大正期になつて吊り橋による交通も出来たが、関東大震災で太いワイヤーが破損し、一時交通途絶の時もあつたが、木製による飯泉橋の架橋が県議会で可決され、河野治平（一郎の父、洋平の祖父）は男を擧げた。大正十四年（一九二五）の春である。

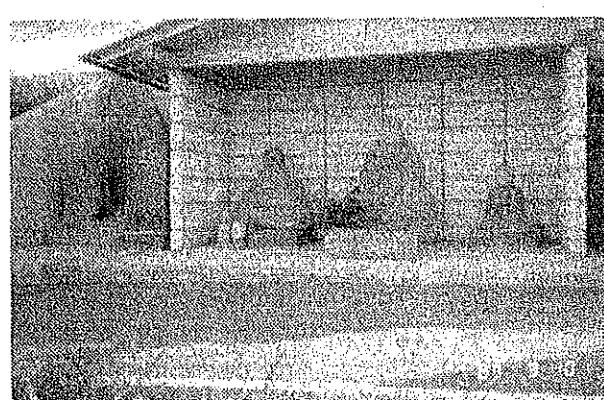
橋の袂の高いのは、吊り橋のためもあるが、河の氾濫を考えたときの橋台を高くする必然性にあつた。袂周辺の歩道がインターロッキング・ブロックで舗装され、アルミ冊子製の高棚もつけられて、觀光的な色彩感覚もあつて、ここから箱根登山、富士山そして曾我山、朝日の

遠望も素晴らしい捨てたものではない。この工事は、道路工事では県西の雄たる米山組（内多古・社長は米山功氏）の請負いで、昭和六十三年の師走に完成している。橋は同三十八年に歩車道分離で開通した。

(3) 地蔵尊三体と水神碑・庚申塔

飯泉橋右岸の〇〇〇九市道（旧控え堤防）を北進して土屋水道工業のある辺までは、江戸期末から地蔵尊祭りとして松明行事が行われた。茶利の利八も、ここに出店

を張つて商売をした。それは毎年八月十三日で、堤防地蔵尊施餓鬼供養祭花火大会として盛会であった。



市道〇〇〇九改修申の塔と地蔵尊同じ碑

位置で西向きになつた（図133）  
地蔵尊三体・庚申塔一基・水神碑二基（大正十一年四月建立の一基は以前からあつたが、他の一基の大正二年九月建立の銘があるものは、向きを正反対にする時に区内のさる所から搬入したもの）は、昭和六十三年度の市道〇〇〇九（旧控え堤防）の改修に

当たり、整備して遊歩道より押めるように模様替えをしたのであるが、西方淨土の思想から西向きに安置させたものであろう。横壁に「平成元年四月十二日、四十四区自治会」の銘板が壁面にはめ込まれてある。

この付近は、江戸期には「喰違(くわちが)い」と称していた。小田原藩の治水政策で、大口に堤防を築いて酒匂川を北方に流れるようにしたので、この地点は川の攻撃面となり、堤防はしばしば決壊し、補強工作がよく行われた。この補強工作で堤防に喰い違いができたことから生まれた字名であろう。

#### (4) 三丁河原

狩川の川筋であつた三丁河原は、幕末に小田原藩主(大久保氏)が七畝割にして希望する農民——多古村を中心とする穴部・蓮正寺村の人たちに分ち与えた地帶である。

出水・洪水のたびに農地は削られ、流出し、丹精の作物も収穫できぬことが繰り返されてきたがその都度、盛り土や客土をし、整地をして生産を図さすという自然との戦いであり、自己への挑戦でもあつた。

敗戦で生命にも替え難い祖先伝来のこの土地を手離さざるを得ない農家もあつた——農地解放の至上命令の故である。

時は高度経済成長期を迎える直前の昭和三十二年十二月、土建業者の田中組(社長田中喜一郎、本社は城内一一三)と西川組(社長湯川薰、本社は東町一一三)は相前後して、三丁河原の最東端(現扇町六一八二五外の地)にプラントを設置した。前者はアスファルトとコンクリートを製造して工事現場に運び、後者はアスファルトの材料を過熱して工事現場に運ぶプラントであった。共に西湘地区建設業界の雄で道路、建築の近代化に大きな役割を果してきたが、時代の流れの読める——先見の明のある業者でもある。

高度経済成長期に入つた昭和三十八年に、三丁河原の一角(扇町六一八二六)に、地元の反対を押し切つて、屎尿処理場として高速化学処理場が三次計画で建設されいつたが、三市(小田原、南足柄、秦野)と四町(大井、松田、山北、開成)による下水道計画が進展しないために、昭和四十八年になつて、県は相模川流域下水道に次ぐものとして、酒匂川流域の下水道化に積極的に乗り出した。その経過は先きに述べたが、肝心の用地は折衝が重ねられて昭和五十五年度より始まり、同五十七年度に完了をみた。

○下水道研修センターは、平成元年十二月完成予定で目

下、急ピッチで工事が進んでいる。

○屎尿処理希釀放流施設は、昭和三十八年着工の高速化  
学処理場の老朽化に伴い、この西側に整備される計画  
で、市予算五億六千万円で、平成二年三月に完工の予  
定で、現在工事が進められている。

○酒匂川右岸終末処理場建設のビジョンは、既にできて  
いる。平成二年度よりその設計にかかり、同三年春に  
着工し、五年ごとに見直しをして平成十二年（二〇〇  
〇）に完工予定である。

私たちの祖先の丹精によつて開拓され、郷土における  
最有力の農業生産地域となつていた三丁河原は、健康と  
憩いの場として、大きく変貌していく日は確実に近づいて  
いる。二十一世紀の扉の開く十二年後は、どのような  
景観の地域となつていることであろうか。

酒匂川（狩川も含めて）の水は美しくなり、生活環境  
もまた改善されて豊かな都市づくりの基盤となる地域と  
して変貌していくことは確かである。

#### (5) 提言

稿を終るに当つて、酒匂川を觀光的な場として再生させることについて、酒井茂雄氏（酒匂川の沿革と氾濫の

歴史の著者）の提言をも織りこんで述べてみたい。

#### (1) 舟航のできる河川にする。

元禄十年（一六九七）、時の大久保藩主忠朝公は酒匂  
川を御厨（御殿場）まで、川舟で通行する願書を幕府  
に届け出た史実があるが、丹沢湖や酒匂堰のできた今  
日、舟航のできる河川としたい。取水堰より下流は川  
底を堀り下げて川瀬を広くし、海から遡る魚族の生活  
の場とする。堰から上流の岩流瀬までは流れる瀬を小  
さく緩やかにして鮎を中心とする淡水魚の生活の場とす  
るとともに、舟航ができるようにする。

#### (2) 観光コースを設定する。

觀光要素は豊富である。大口周辺の地形も逸品だが、  
酒匂川の土手の六地蔵（左岸の金手の三角土手・鬼柳  
土手・飯泉の土手・右岸では多古の土手・中曾根の土  
手・大口の土手は、昔から難所で地蔵尊の守護を願つ  
た所）巡りを兼ねた舟航も一つの案。金手の土手など  
は、文明堤復旧の簗之助が手がけた所なので公園化  
して觀光コースにのせてよい。また片道は舟航で、残  
る片道は飯泉山勝福寺・玉宝寺・福田寺（飯田岡）・正  
應寺（府川）・蓮乗寺（小台）・大長寺（吉田島）・珠  
明寺（

寺（斑目）・最明寺（金子）・白山神社（多古）・寒田神社（松田）などの神社、仏閣を加える。

(3) 堤防の強化

酒匂川の河道（A）を市道○○○九の西側の多古・今井（B）地域と左岸の飯泉山勝福寺南東の上・中・下新田地域（C）を考慮すると、最も高いのは河道（A）で最も低いのはB地域で、BはCより七m程も低い。地形的にみたら天井川的である。殊に飯泉橋下から上流へ二百m程の間の中洲は、左右両岸の堤防とさして高さが変わらない。この地形は洪水の時に最も弱い。だから河道を掘り下げるとともに、堤防そのものを強化する必要がある。

(4) 堤防の緑化を図る。

土手を洪水から守り、土地の有効利用のために、植樹は必要である。酒井氏の提言のように藩政時代の尊徳翁ゆかりの松あるいは柳、田中丘隅の大口土手への桃・李・梨・栗の移植、代官岩手藤左エ門が土手裏に柳を植える指導をしたことがあるように、適地適樹の原則に立つて緑化を図る。

（平成元・十一・三完稿）

## 編集後記

○郷土の多古は、縄文時代からの古い歴史を持ち、丘陵・川などの自然にも恵まれた土地である。多古村としての長い時代と、二川村・足柄村・足柄町そして小田原市の一角として発展してきた歴史を持つて今日に至った。

注1 明治二十二年四月一日・多古・井細田・今井の

三村が合併して二川村となる。

注2 同 四十一年四月一日、二川・富水・久野・芦子の四か村が合併して足柄村となる。

注3 昭和十五年二月十一日、足柄村は町制を施行。

注4 同 年十二月二十日、小田原町・足柄町・大窪村・早川村・酒匂村の一部（山王原・網一色）

が合併して、小田原市となる。

多古に生まれ、多古に育った人々も、新しく区民になられた方々も、ひとしくこの郷土に愛着を感じ、よりよい発展を願つてやまない。この郷土の地理的・歴史的事象を知つて現在を正しく理解することは、大切であり己れをすることにつながると思われる。温故知新の立場でこれらを追求し、まとめて後継者に残すことが、この仕

事の目標であつた。

○多古の郷土誌編集の動きは、昭和五十五年の加藤公民館長時代にもあつたが、本格化したのは小林館長時代であつた。始めは公民館主導で会合を重ねたが、同六十年六月九日の三者会談（公民館・自治会・元老）で、目次にある二十の大項目と中項目の原案が検討された。

平成元年七月に次の編集委員会が構成され、自治会主導で仕事は進展し、翌二年三月に完稿をみた。

### 多古の郷土誌編集委員会

○編集責任者

元小田原市立  
白鷗中学校長

野頼徳治

○委員長

第44区自治会長

中村 勇

○副委員長

同 副自治会長

中島正雄

同

多古公民館長

土屋治郎

○委員

自治会

江藤常雄・米山 功

自 治 会

中山 馨・高橋 保

自 治 会

柳 実・中山 彰

自 治 会

瀬戸一雄・中山美平

自 治 会

上原理平・村山啓造

顧問・元老

下澤連蔵・村瀬菊雄

一 磯崎武雄

元公民館長 小林 堯  
公 民 館 清水 昇・一寸木彰  
星崎政興・村山泰久

佐久間文代・岩本敦彦

○記述は、客観的資料に基づいて主觀の入らない記述をすることが原則であるが、資料不充分で聞きがたりや調査活動にも限界があつて、二、三推論をした事象もある。

(1) 「酒匂川と多古」の項は、酒匂川の沿革と氾濫の歴史（酒井茂男著）の好資料を得て、解明された所も多かつたが、なお不明の事象も残つた。

(2) 「上多古の開発」で、添田一族をとりあげたが、そのルーツ調査の段階で、唐津市立図書館長（郷土史研究会長）のご指教があり、「添田氏の祖は、現田川市添田町が幕藩体制下にあつたころの豊前国添田村の出身であり、この村は英彦山修験者たちの集落として古い歴史を持つ……」との情報とともに「英彦山と九州の修験道」の好著も入手し、その一端は引用させて頂いたが、現地調査もし研究家にも接して解明したいところであつた。

(3) 「白山神社」の項では、その性格、多古への伝来経路など、不明な事象もあり、加賀の白山神社やみちのくの中尊寺の白山神社にも探訪の旅をしたが、記述に当つては「白山・立山と北陸修験道」の好著に負う所が大きい。が、小田原北条氏の長吏頭小頭であつた太郎左エ門や江戸期に浅草にいた長吏頭の弾左エ門の著とされる「白山大権現略縁起」の研究も進めるべきであつた。

(4) 資料皆無に近い中世史では、福田以久生教授（愛知大）の著たる「駿河・相模の武家社会」および論文「早川庄の地域」（小田原地方史研究三号）に負うところが大きかつたが、地名など現在と対応できる判然さを欠いたままに、稿を終えたことを悔やんでいる。

(5) 「助郷制と多古」および「酒匂川の徒渉制と飯泉の渡し」の項は、宇佐美ミサ子女史（小田原女子短大講師）。また、内多古の開発でとりあげた穴部堰・池上堰・久野堰の項は、内田清氏（小田原郷土文化館長）の研究論文に負うところが大であつた。

○聞きがたりに協力して下さった方々（敬称略）  
・中村英治（故）・上原理平・磯崎峯雄

- 添田春原 磯崎武雄 中山一櫻 神奈川県地盤地質調査報告 小田原市史料(歴史編)
- 磯崎なか 岩田マサ 加藤栄造 小田原市水道事業年鑑 新編相模風土記稿
- 土屋政春 加藤ヤエ 北島澄三 日本史講座(雄山閣刊) 小田原市遺跡分布図
- 神尾芳之助 塩海文雄 村山啓造 久野丘陵詳細報告書 久野の歴史(立木)
- 中山美平 小林堯 田渕徳三 久野坂下窪遺跡 日本原始文化(三森)
- 宇佐美薰(ウエスコ) 山崎ヤス 菊川儀男 小田急五十年史 酒匂川氾濫記録(宇佐美)
- 浜野愛之助(坂下) 立木望隆 磯崎義明(田島) 酒匂川の沿革と氾濫の歴史(酒井茂男)
- 野地亀太郎(厚木) 森徳行(二宣) 和田登(東町) 二宮尊徳全集(十四巻) 郷土文化館研究報告21号
- 佐野正幸(東町) 山口貢(浜町) 横山禪一(尼ヶ崎) 神奈川文化(二巻二号) 小田原地方史研究(三号)
- 清水真澄(成城大) 相原フミ(相原英) 郷土文化館 駿河・相模の武家社会(福田以久生)
- 小田原市立図書館 市役所水道課 同 防災課 庄園史の研究(西岡) 日本交通史研究(本庄)
- 同 文化財保護課 同 道路課 同 資産税課 足柄村多古字三丁河原図幅(中山一櫻自八〇九番至一八番)
- 同 生活環境課 箱根温泉地学研究所 本光寺(今井) 小田原の助郷制(宇佐美) 日本宗教事典
- 眼藏寺(池上) 長安寺(寺町) 玉宝寺 小田原の助郷制(宇佐美) 日本宗教事典
- 福厳寺(中町) 正應寺(府川) 蓮華寺(千代) 穴部・池上・久野堰の研究(内田清)
- 最明寺(金子) 円通寺(新穂町) 妙泉寺(御幸ヶ浜) 府川稻子家文書 郷土教育提要(足柄小)
- 松浦資料博物館(長崎) 唐津市立図書館 田川市立図書館 小田原の道祖神(調査報告) 小田原の野仏(全上)
- 鬼鹿毛馬頭観世音図幅(小山町) あしがら郷土読本(足柄小)
- 神奈川県神社誌 英彦山と九州の修驗道 白山・立山と北陸修驗道
- 諏訪原・多古丘陵の地質(城内高・内田教諭論文)
- 箱根火山地質図(久野久)

### ○主な参考文献

- 神奈川県神社誌 あしがら郷土読本(足柄小)
- 英彦山と九州の修驗道 白山・立山と北陸修驗道
- 白山神社と被差別部落(本田 豊)

- ・日光山と関東の修驗道
- ・神奈川県農地改革史
- ・関東大震災による小田原の被災状況
- ・小田原近代教育史
- ・神奈川県震災誌
- ・想いはろばろ（田代謙一）
- ・明治小田原町誌
- ・高校日本史（清水書院）
- ・横浜貿易新聞（神静民報）
- ・年表小田原の歴史（内田）
- ・国史総合年表（雄山閣）
- ・玉宝寺過去帳（寺の過去帳を尼ヶ崎市に住む横山祥一氏が書写整）

なお、本誌刊行に当り、序文を賜わった小田原市長山橋敬一郎先生にお札を申し上げるとともに、六年に近い編集の仕事の過程で物心両面に亘ってご支援を賜つた方がた、そして校正の仕事を快く、お引き受け下さった皆さんに深い謝意を表して筆を置く。

平成二年三月三日、編集責任者 野頼徳治

○表紙の地図は、小田原市役所足柄支所（旧足柄村役場で、昭和五十二年以降は本庁に統合された）が、保存していた昭和三十三年作成の地籍図を転写し作成されたもので、明治十六年に測量の迅速図である。

末尾になつたが、繁用の中を執筆して下さった玉宝寺住職安藤実英師ほかの方がた、そして多くの聴きがたりや資料収集に協力して下さつた方々など、関係各位のご尽力のおかげで完稿をみることができた。刊行費など一切の経費を本地区自治会が特別措置によつて処理されたことは感激の極みであり、筆を進める原動力となつた。

本書は、未完成の作品である。いずれ後進の方によつて佳き作品が完成することを期待するものです。

## 編著者のプロフィール

大正4年5月1日、静岡県に生まる。

静岡県立富士中学校（現富士高等学校）を経て東京府青山師範学校（現東京学芸大学）を卒業。次いで立正大学専門部（現立正大学）において、地理・歴史学を専攻。以来、東京および小田原市の小・中学校教諭・教頭・教委指導主事・中学校長を歴任。

著作には、「教師のための郷土学習指導法」（共著）「箱根町教育史」「小田原有信会沿革誌」「あしがら郷土読本教育史編」などがあるが、神奈川県史人物篇・小田原市史料現代編などにも執筆協力している。

## 多古の郷土誌

平成二年三月三十一日 印刷  
平成二年三月三十一日 発行

編著者 元 小田原市立白鷗中学校長  
野 賴 徳 治

小田原市扇町四一七一九  
電話〇四六五—三四一〇一七六

発行者 第四十四区自治会長  
中 村 勇

小田原市扇町四一七一八  
電話〇四六五—三四一四〇六二

印刷所 ソーゴー印刷株式会社  
小田原市扇町四一八一四十七  
電話〇四六五—三四一一七八二

（非売品）

